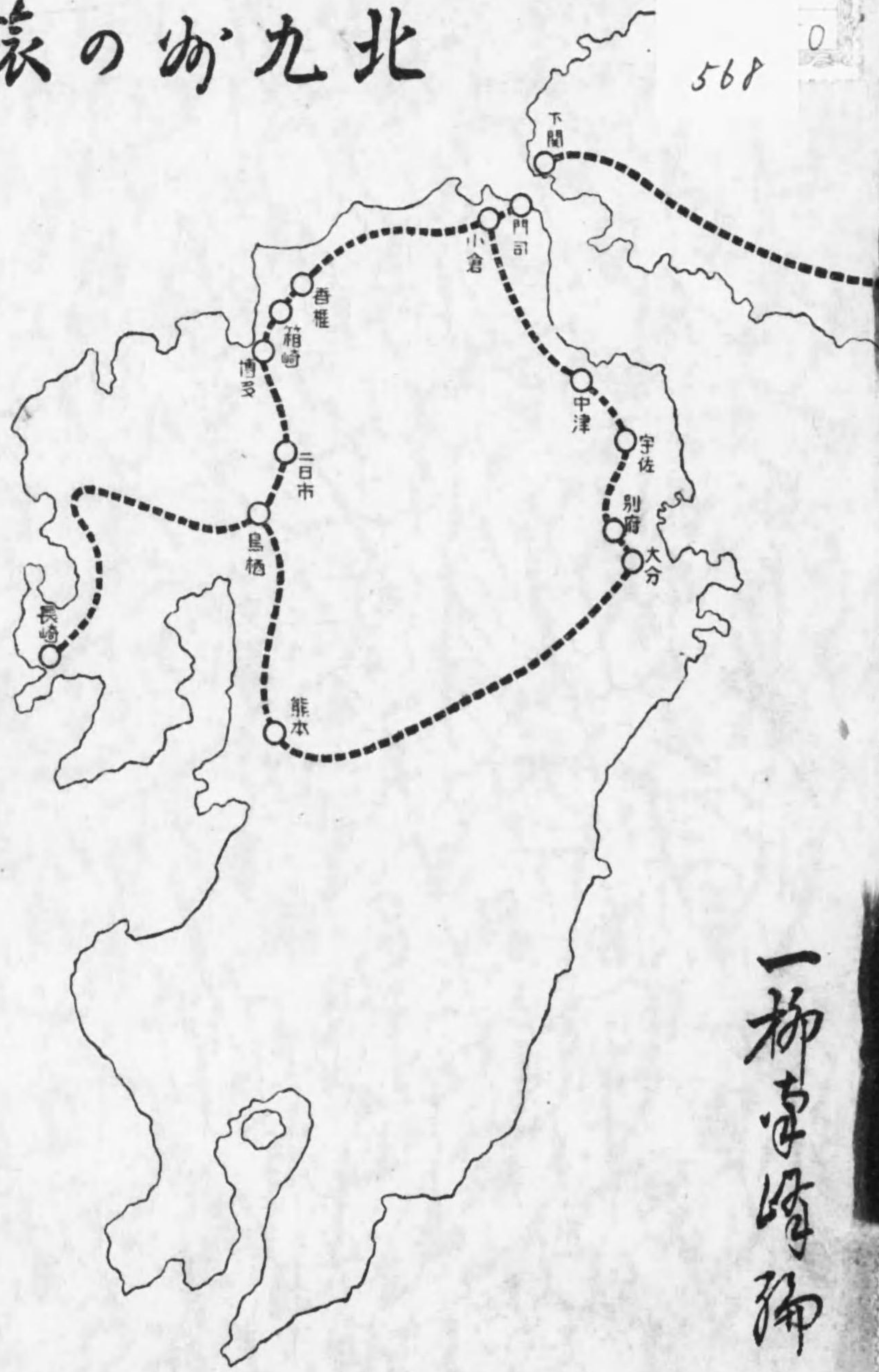
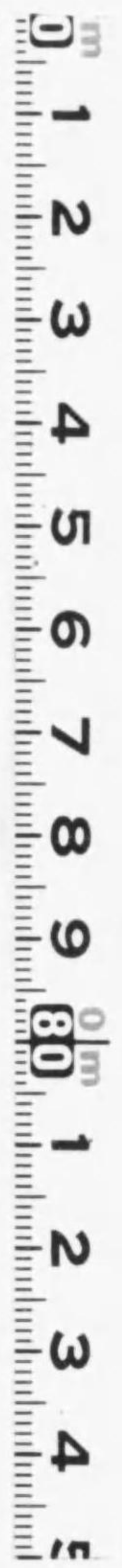


旅の州九北

特261 5
568 0



一柳家傳



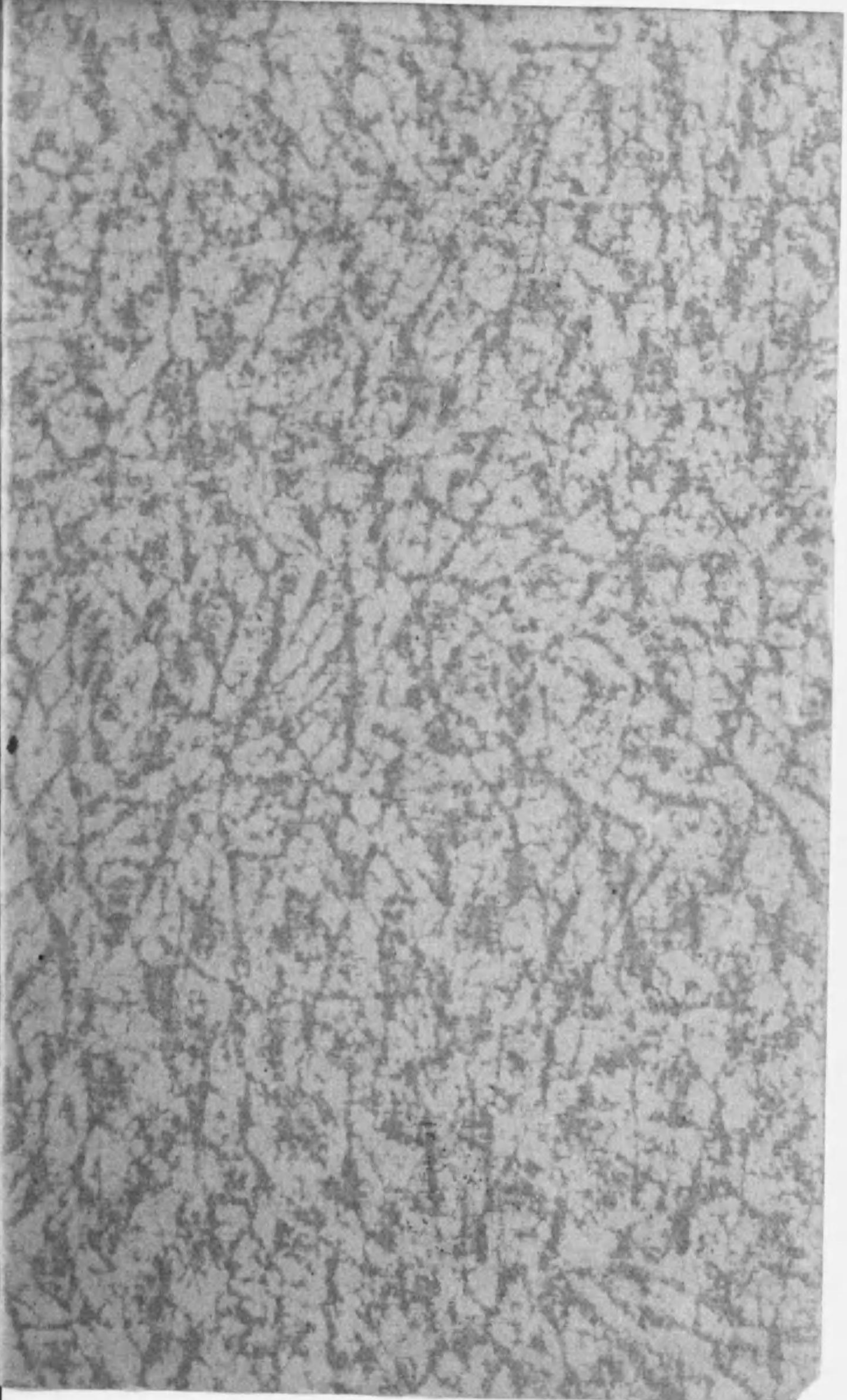
始

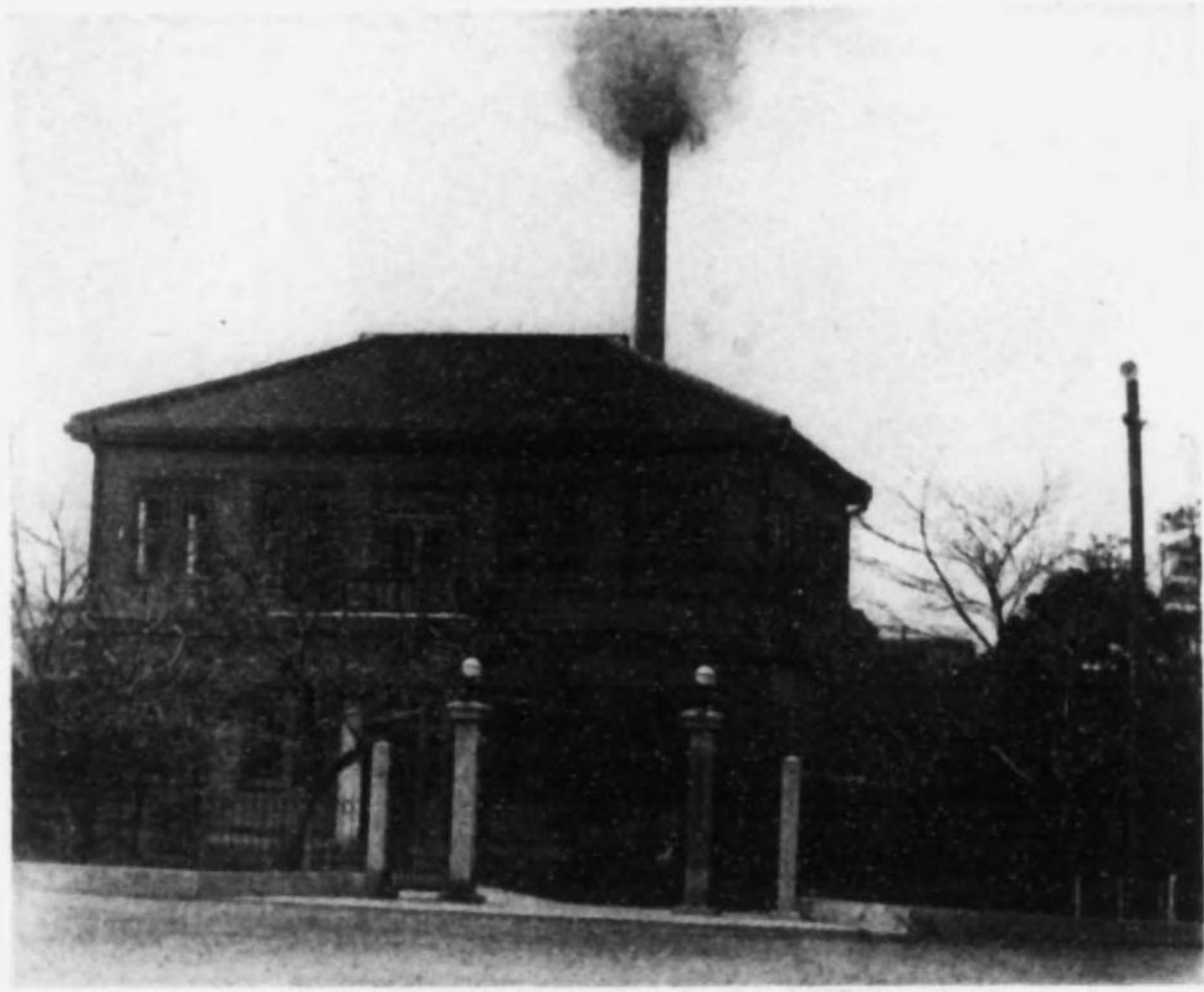


物261
568



小丸
阿の旅





王子製紙小倉工場事務所

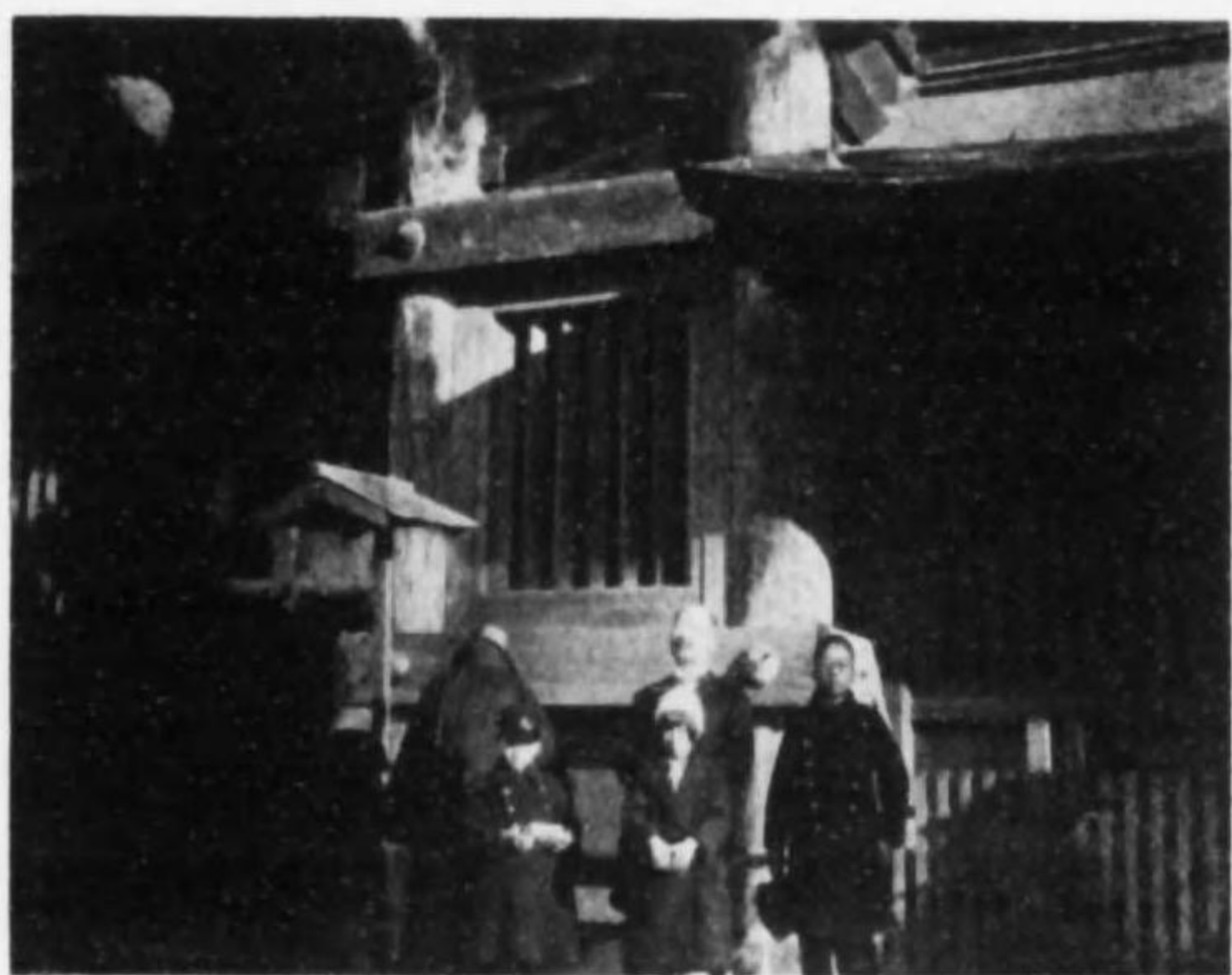


同上 第三、第四工場抄紙室

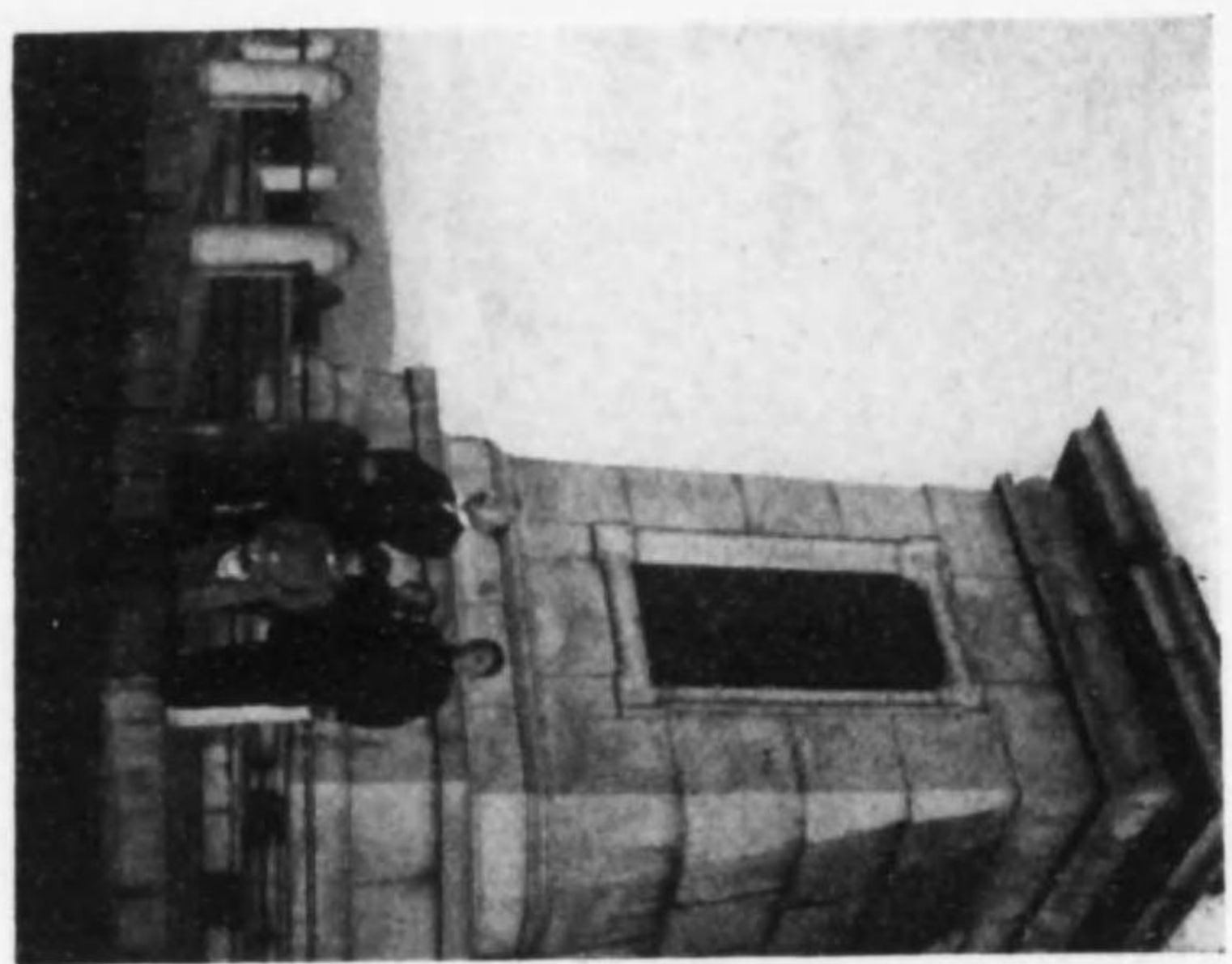
香推宮樓門の左側にて



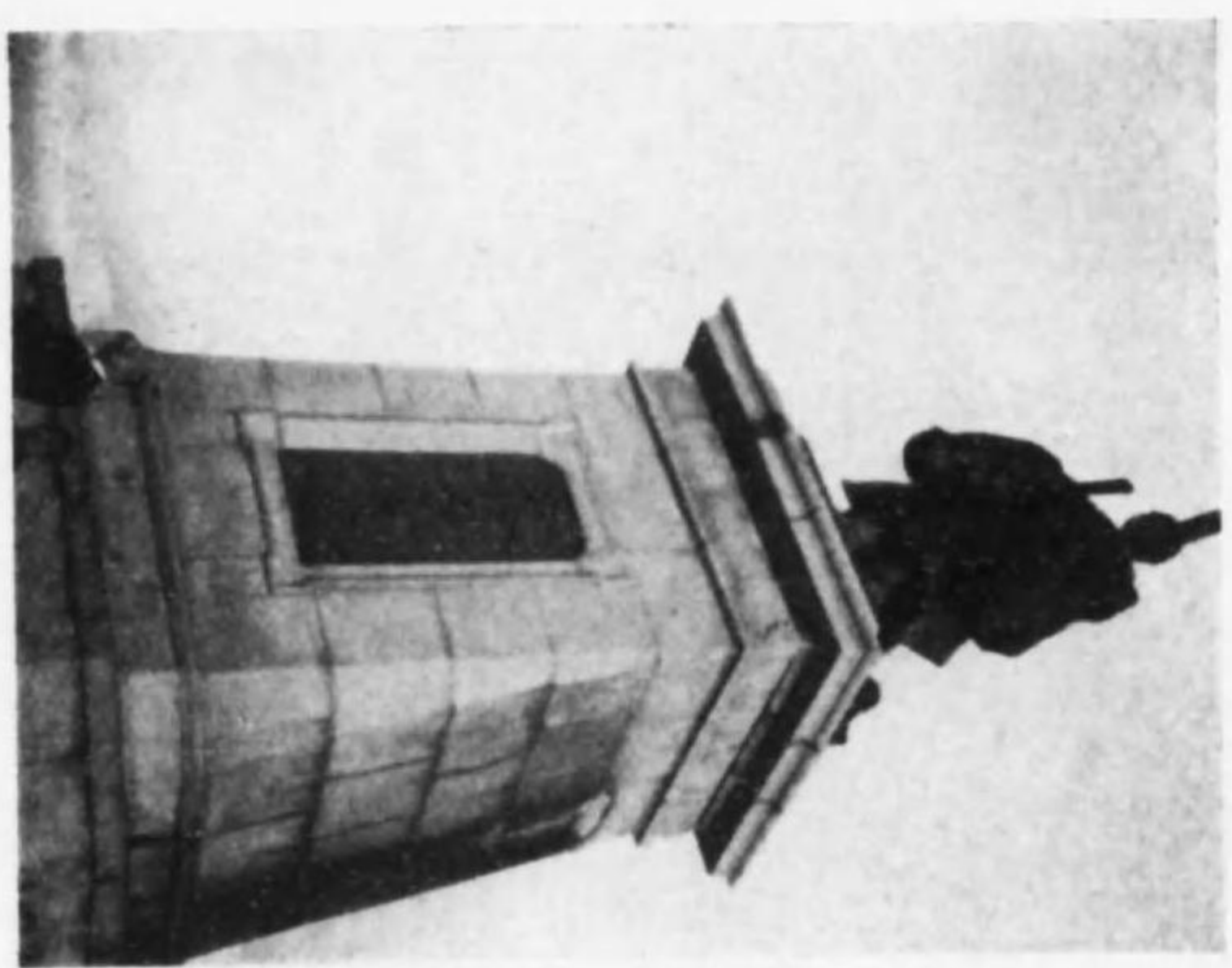
箱崎宮樓門前にて



同上 壘下にて



福岡東公園壘山上皇銅像





太宰府天満宮飛梅



太宰府観世普門寺本堂



福岡東公園日蓮上人銅像



同上元冠記念館



熊本城址入口にて



熊本行幸坂 谷村計介君銅像前にて

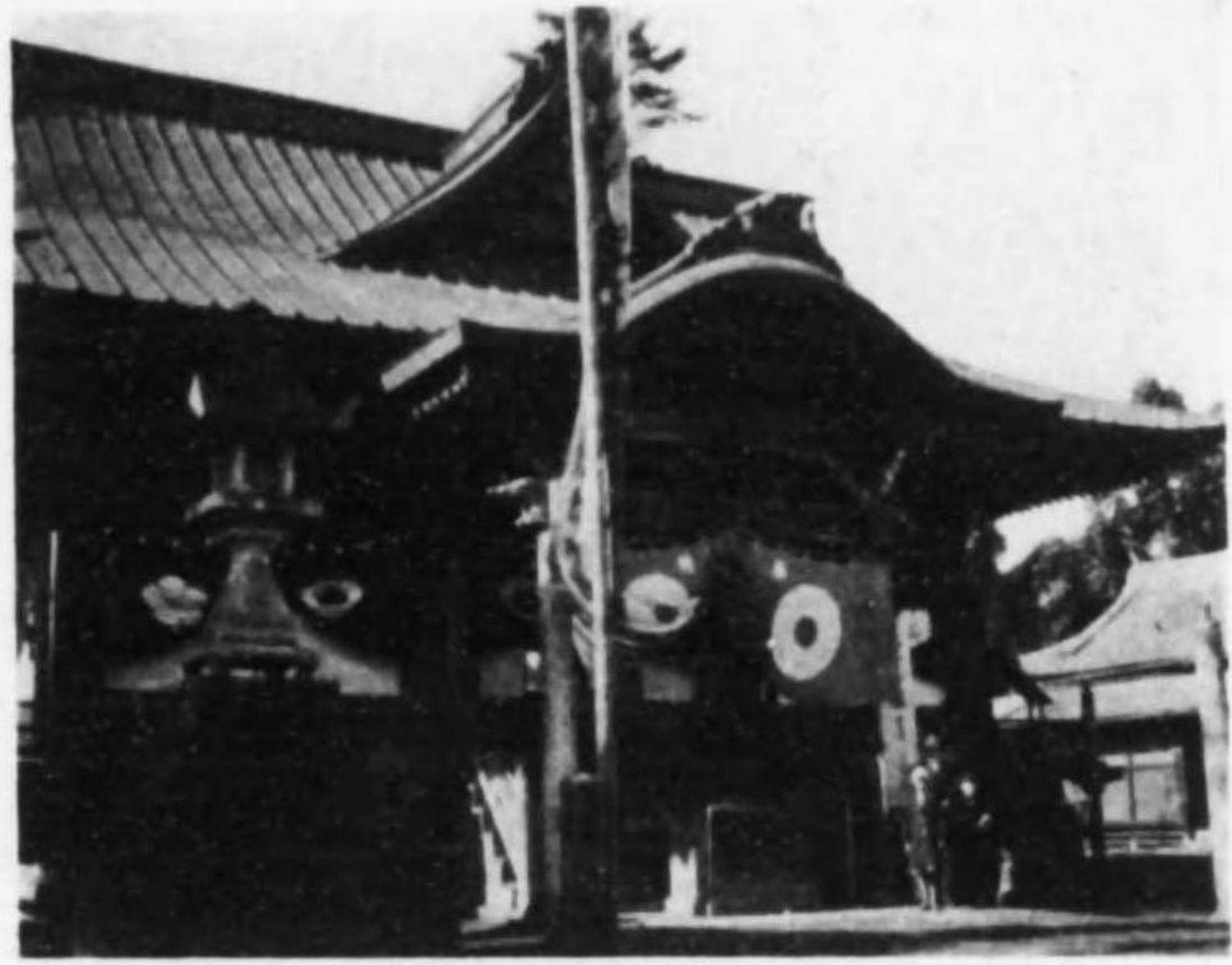


熊本城址宇土櫓前にて

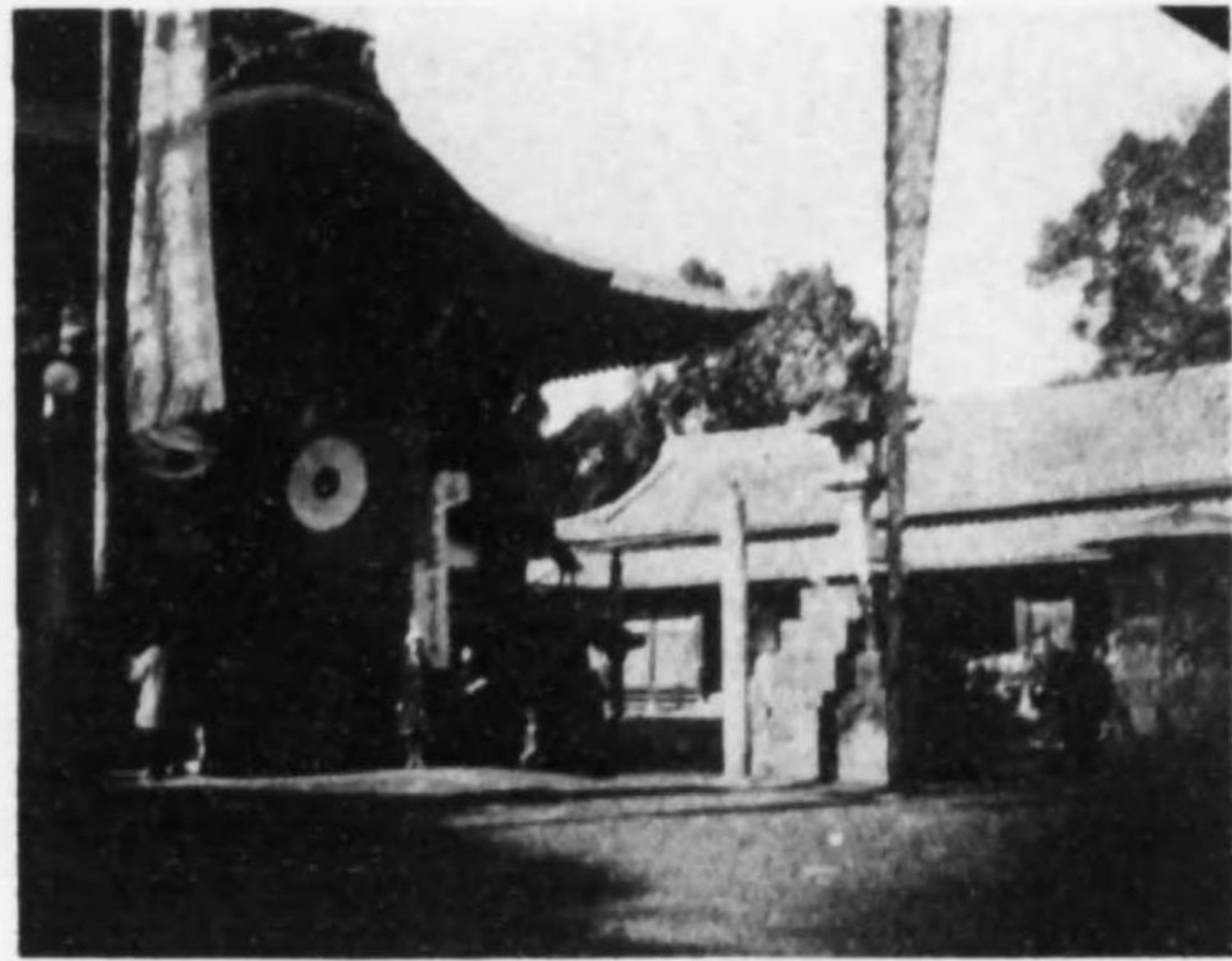
一 其



大宰府観世音寺鐘樓



熊本 本妙寺本堂前にて
其一



同上 其二



熊本城址宇土櫓前にて

其二



熊本 加藤神社



耶馬溪青の洞門入口にて



宇佐神宮拜殿にて



別府温泉の血池地獄にて



同上海地獄にて



羅漢寺山門



てに堂本上同



てに坂突胸道參寺漢羅 溪馬耶



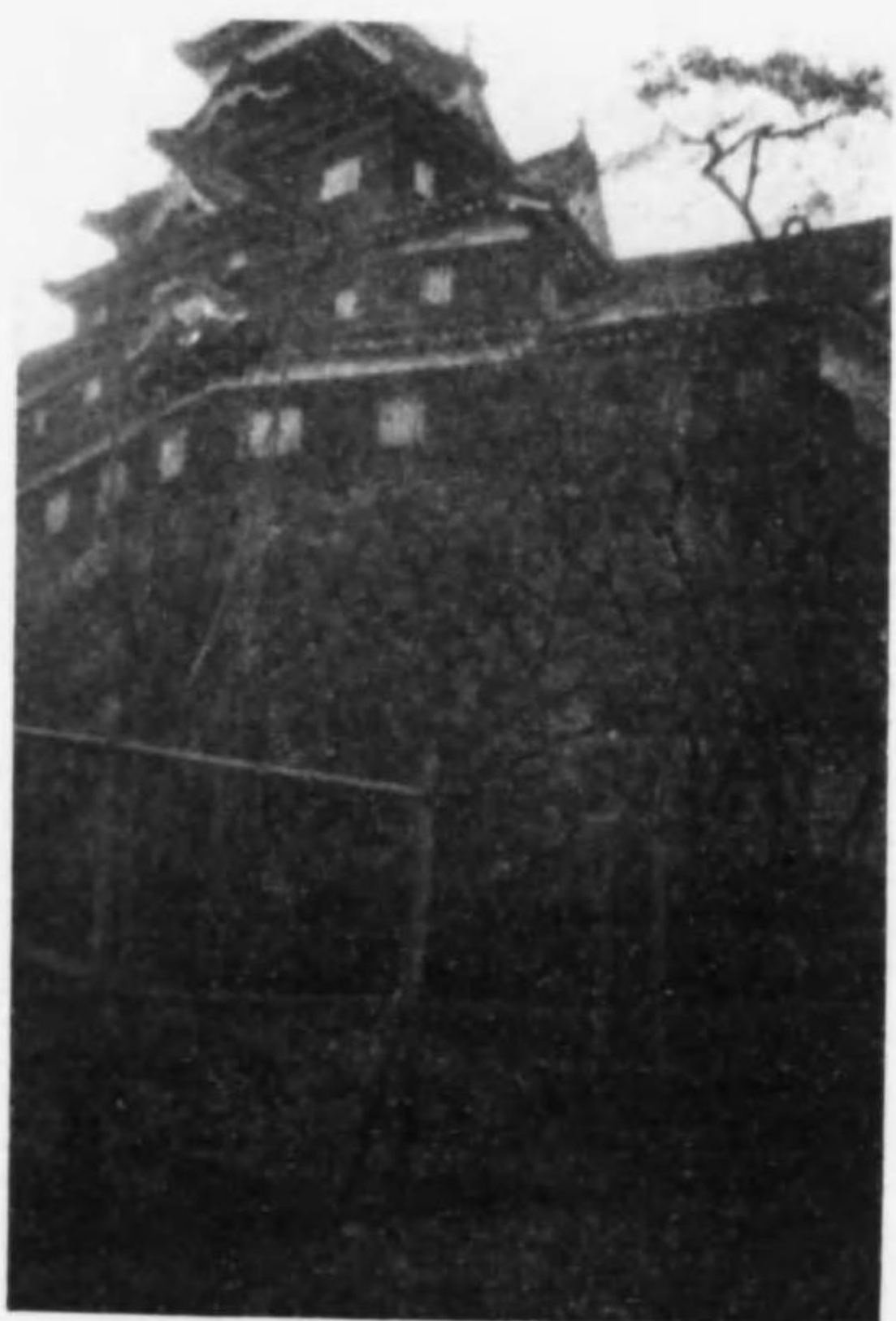
てに橋石 上 同



姫路城外濠より天守閣を望む



姫路城入口にて



岡山城



岡山後楽園にて

はしかき

本書は、九州北半部一周の管見記に過ぎずして、其誌すところ、亦一般周知の範圍を出てす、従て之を刊行するの價値なきや勿論にして、唯之を自己の爲には後日の備忘とし、又同行したる兒童等には史的教養の一助たらんことを欲し、複寫に代へて印刷に附したるのみ、讀者希くは其記述の陳腐と出版の愚を笑ふ勿れ。

昭和七年八月上院

北九州の旅 目次

はしがき

一	下關見學	二
二	門司見學	六
三	小倉製紙工場參觀	九
四	香椎宮參詣	一一
五	箱崎八幡參詣	一四
六	福岡見學	一六
七	太宰府見學	一八
八	長崎見學	二四
九	熊本見學	二九
十	別府溫泉地獄廻り	三五

土	宇佐神宮參詣	三七
三	耶馬溪探勝	三九
	(イ) 鶴市二靈入柱記念碑	四〇
	(ロ) 競秀峰	四四
	(ハ) 羅漢寺	四五
	(ニ) 洞門の由來	四九
三	中津福翁邸址	五三
四	小倉工場に戻りて	五四
五	本州に歸る	五五
六	岡山後樂園と鳥城	五五
七	姫路白鷺城	五七
六	郷里訪問歸京	五九

目次 畢

北九州の旅

一 柳 南 峰 編

去年の正月、中國四國を跋涉せし以來、既に一周年となりぬ、今茲昭和壬申の初旅には、之に次ぐ地理的順序として、九州北部の巡歴を企てたり、蓋九州小倉には我王子製紙會社の分工場あり、此工場は舊と株式會社小倉製紙所の經營に屬せしが、大正十三年四月我社に合併せしを以て、爾來同工場の視察を試みんと欲せしも、未だ其機を得ざりしを以て、此際其視察を主眼とし、傍其地方に於ける史蹟名勝を見學せんと志したるなり、然れども、此行亦中國四國の旅と同じく、年初の休暇を利用するにあるを以て、日數頗る短く、爲めに豫期の旅程を實行する能はざるのみならず、其各所巡歴に就ても、多く自動車を利用せしため、殆んど走馬燈の如く、頗る匆忙を感じたりき、故に其薄き印象の須臾にして消失せんことを虞れ、茲に見聞の大要を録して、以て後日の記念となすこと爾り。

一月一日晴、早朝氏神府社、氷川神社に詣したる後、午前中に舊藩主を始め、知己親戚

二
等數氏の宅を年賀廻禮して、午後一時富士號に搭し、東京驛を發す、豚兒直方、正直、辭子隨伴す、長女喜和子は今歳の正月は東京にて自適したしとて隨伴せず。

一 下關見學

二日、午前八時五十分下關に着すれば、小倉工場員井澤新君出迎へ呉れらる、直ちに自動車を驅りて、共に壇の浦に至り、源平の古戰場を弔ふ。

壇の浦は、云ふまでもなく、下關市の東端より長府町に至る一帯の海岸を稱するものにして、途中に御裳川と稱する一小流あり、此沖こそ、源平最後の戦に、恐れ多くも、安徳天皇が二位尼に抱かれさせられて、崩御したまひし所なりと云ふ。此小流今は水絶えて、只橋梁を架するのみ、之を御裳川橋と云ふ、橋畔に左の如き標札建てり、壽永の昔源平決戦に由緒深き處なり

二位 尼

今そ知る御裳川の流には浪の底にも都ありとは

長府方面に向ひ、遙かなる沖合に、小なる二列島を望む、一を滿珠島と云ひ、一を千珠島と云ふとかや。

途を復して赤間宮に詣し、又其拜殿の左側、紅石山の麓にある、平家一門の墓を弔ふ、赤間宮は、安徳天皇を齋祀し、平家一門の墓は、其標札により、前列に、有盛、清經、資盛、教經、經盛、知盛、教盛の七靈、後列には、家長、忠光、景經、景俊、盛繼、忠季、二位尼の七靈を埋葬し、俗に之を平家塚、或は七盛塚と稱すと云ふ、風雨に暴蝕さるゝこと七百餘年、青苔碑石を蔽ひ、そゝろに盛衰の跡を偲ばしむ。

尙赤間宮記略によれば、本宮は官幣中社にして、俗に天皇社と稱す、舊時は阿彌陀寺と稱する寺院なりしを、維新後社格に改め、社殿を造營す、傳へ曰ふ、平家の一門壇の浦にて没落せし時、安徳帝の御座船又水に沈み、帝は二位の尼に擁せられて海底に入り給ひしが、其後畏くも御遺骸を土人の手を以て上げ參らせ、阿彌陀寺の堂前に葬り奉りしが、後鳥羽天皇建久二年長門國に勅して、御陵上に御影堂を建て、阿彌陀寺を以て勅願所と定められ、建禮門院の御乳母の女少將の局(剃髮して命阿と號す)を以て御影堂に奉侍せしめ、永く天皇の御冥福を祈らしめ給ふ、其後天正年間火災に罹りて灰燼に歸せし以來、久しく頽廢のまゝ、過ぎ來りしが、心あるもの等私かに浩嘆し、十一世の住職持國和尚、亦寺運の復興を企て、神廟の前に、安徳天皇之陵是其所也云々の碑を建て、世人の注意を促さんとせしも、依然挽回するに至らず、明治維

新に及びて、寺格を廢して神社とし、御影堂を天皇社と改め、次て明治八年十月七日官幣中社に列せられ、地名により赤間宮と號け奉り、翌九年社殿改造の工事に着手して、十九年の初春漸く竣成を告げ、以て今日に至れりと云ふ、其神域廣濶にして境内一千二百五十坪、社殿拜殿、神饌所、奏樂舎、幄舎、祭器庫、社務所等何れも壯嚴を極め、四季の花卉亦各所に栽培して雅致に富み、背後に古杉老松鬱蒼たる紫石山を負ひ、前面には早瀬の瀬戸を隔て、豊前の明神崎と相對し、風景の絶佳なること、稀に見る處なり。

赤間宮を辭して、隣接せる安徳天皇御陵に詣し、謹で參詣簿に署名せり、御陵は阿彌陀寺御陵と稱し奉り、山陽道以西に於ける唯一の天皇御陵とす。左に古今名士の懷古の詩歌を録し、後日の備忘とす。

豊 太 閣

浪の花ちりにしあとをこととへはむかしなからにぬるゝ袖かな

毛 利 秀 元

きくたにもかなしかりけり浦波の花のすかたと消えはてしよを

小 早 川 秀 秋

とゝめをきてしつみははてぬ君が名を波のたよりにきくそ悲しき

毛 利 元 徳

國のためかつき上くへき海士しあらはむなく玉の沈みはてめや

伊 藤 博 文

萬古珠沈碧海陔。 山圍潮汀恨悠悠。

白雲紅葉旌旗色。 落日平分壽永秋。

杉 孫 七 郎

龍艦不歸西海陔。 興亡若夢水悠悠。

女兒休唱裳川詠。 華表高輝七百秋。

余も亦拙句一首を思ひ出て、

みなそこの藻屑となりし武士の

あはれを偲ふはやともの瀬戸

御陵を辭去して、更に其左方に隣接せる春帆樓を訪ふ、同樓は日清戦役媾和談判の行はれたる所にして、當時の會議室は今史蹟として保存せらる。

關門聯絡船出帆の時刻迫りければ、自動車を進せしめ、今や離陸せんとする刹那の豊山丸に飛乗り、乗るや否や乍ち發航す、時に午前九時五十分なり。

下關の港口にて

見渡せは海も林に似たるかな

いていりしけき船のほはしら

船中より右舷に岸柳島を望む、此島は昔時小倉藩土宮本武藏、長門の士佐々木岸柳が、武を闘はして、岸柳の遂に斃れし所なりと云ふ、即此名ある所以なり。

一一 門司見學

航行僅に十五分にして門司港に上陸し、亦自動車を驅りて、和布刈神社及甲宗八幡宮に詣す。

和布刈神社は縣社にして、市の東北端古城山にあり、地は壇の浦と對し、相距ること僅に數町、所謂「早鞆の瀬戸」の最狹部を成す所なり。

由來記によれば、當社は隼人神社とも云ふ、祭神は玉依姬、彦火々出見尊、豐玉姬、鸕鷀

草葺不合尊、阿度目磯良の五座なり。

當社和布刈の神事は、古來の重典とす、此神事は、陰曆十二月除夜、子過丑の刻に、祠官衣冠して、宮殿の寶劍を胸に當て、炬を舉げ、石磴を降りて海に入り、海布を採りて神前に供し、又分ちて國守邦君に獻進するを例とせり、而して此海布を刈るは、一鎌に限るものとす、若し二鎌刈れば、潮に溺るゝの難ありと云ふ、又此神事を行ふ時は、社頭、民家の燈火、海上かゝり舟の火、悉く之を消し、其刻限の前、半時ばかり、浪大に立ちて海荒らし、其海底に入らんとと思ふ頃、しばらく浪靜まりて、又前の如く半時が程は、海荒ると云ふ。

神社考に隼友神は彦火々出見命を祭る、神功皇后征韓の時に、出顯したまふと曰へり。

余が當社に參詣を志したるは、謠曲和布刈によりて之を知らばなり、仍て茲に同曲の一節を拔萃す。

(前略)さる程に、和布刈の時至り、虎嘯くや風早鞆の、龍吟すれば雲起り雨となり、潮も光り鳴動して沖より龍神あらはれたり、龍神すなはち現はれて、和布刈の所の水底を穿ち、拂ふや潮瀬にこゆるぎの磯菜摘む、めざし濡らすな、沖に居れ波、沖に

居れ波と夕潮を退け、屏風を立てたる如くに分れて、海底の砂は平々たり。神主松明振り立て、御鎌を持つて岩間を傳ひ、つたひ下つて、半町ばかりの、海底の和布を刈り歸り給へば、程なく跡に潮さし満ちて、もとの如く荒海となつて、波白妙のわたづみ和田の原、天を浸し、雲の波煙の波風海上にをさまれば、蛇躰は龍宮に飛んでぞ入りにける。境内より壇の浦方面を眺望しけるうちに、日本郵船伏見丸の巨躰顯れ、悠々として入港し來るを見る。社殿前の石階を下りて浪打ち際に至り、和布刈神事の行はると云ふ邊りを眺めけるをりに。

早鞆の浦の浪風しつかにて

海松藻もきよきやしろあふきつ

同社を辭し、途を復して甲宗八幡宮に至れば、樓門の礎下にて歸省中の社友濱井憲一君及我王子製紙會社專屬販賣店たる東京中井商店の門司出張所長海本嘉十郎君夫妻に邂逅す、兩君は既に參拜を了へての歸途なりけり。

數十段の石磴を上りて社殿に詣し、國家安穩を祈る、社號甲宗八幡と稱するは、神功皇后三韓征伐の時に用ひ給ひし甲冑を、同社の神寶として奉崇するが故なりとぞ。社後に廻りて、神惠閣の能舞臺を覗く、此舞臺にては梅若一門時々來りて演能すと聞く。

三 小倉製紙工場參觀

甲宗八幡を辭して自動車に復し、彦島を望みつゝ、大里を経て小倉市に直行し、午前十一時頃同市字篠崎なる我小倉工場に着す。當工場は、元千壽製紙株式會社の建設に係り、明治二十四年一月より操業を開始せしが、後小倉製紙所として個人の經營に移り、更に明治四十五年七月、之を株式組織に改めて株式會社小倉製紙所と稱し、大正十三年四月に至り王子製紙會社に合併して其分工場となれるものなり。今當工場の概要を掲ぐれば左の如し。

工場の規模

用

地

二萬九千八百餘坪

構造 煉瓦造、木造平家及二階三階建

建坪 七千六百餘坪

抄紙機 百十二吋 フォドリニヤ式 一臺

百八吋 同上 一臺

百吋 同上 二臺

原動力 電力 四千八百六十馬力

汽力 三千九百馬力

(昨年新設したる火力發電所の煙突は高二百二十六呎にして九州第一と稱す。)

原料 破布、稻藁、紙屑及木製バルブ等を用ふ

製品ノ種類 各種印刷用紙、畫學用紙、筆記用紙、郵便葉書用紙、帳簿用紙、

莫口紙等

一箇年ノ産額 三千六百萬兩

直ちに工場事務所を訪ひ、鈴木工場長と新年の賀詞を交換し、中村會計主任の案内にて、場の内外を巡覽せしが、作業は正月三日間休業の爲め、其狀況を視る能はず、仍て先づ各地を遍歴したる後、歸途再び立寄ることゝし、暫く休憩の後、同工場を辭し、

途次小倉城址の廓内を通過して小倉驛に至る。

四 香椎宮參詣

午後零時四十九分小倉驛を發し、戸畑、枝光、八幡等、煙突林立せる工場地帯を車窓より望見しつゝ、通過し、午後二時二十分香椎驛着、自動車を驅りて香椎宮に詣す、香椎驛より一の鳥居を経て門下に至る凡そ八丁餘なり。

香椎宮御由緒略記によれば、當社は元と香椎廟と稱し、筑前國糟屋郡香椎村に鎮座せらる。

祭神は仲哀天皇、神功皇后にして、相殿に應神天皇、住吉大神を配祀せり、仲哀天皇八年九月神功皇后と共に樞日宮に於て、熊襲征討並に三韓御進發の御軍議あらせられしが、其翌九年二月天皇俄に樞日宮にて崩御あらせられしに因り、皇后躬ら其地に祠を建て天皇の神靈を齋き奉り給ふ、是即ち香椎廟の最初なり、皇后崩御の後、元正天皇養老七年、九州に詔して課役を起し、仲哀天皇宮廟の傍に新に大廟を造營し、工成り以て皇后の神靈を鎮祭し給ふ、時に聖武天皇神龜元年なり、是に於て香椎廟大成し、廟範亦具さに備る、詔して神境の四限を定め、神領を賜ふ事八百四十三町な

り、征韓功臣の裔孫四人を神司と定め、爾來其子孫を四黨と稱し、奉仕して維新に至る。爾後伊勢大廟に亞ぎて御尊崇最も篤く、又太宰帥新任の時は、先づ當廟に參詣して後、國政を見るを例とせり、貞觀六年廟司四黨の任期を六年と定められ、交替して大宮司に任ず、延喜の制神社に列せず、獨り廟と稱す、圓融天皇の頃より其趣神社に近づきたるもの、如く、正治元年の頃に至り、祭神は神功皇后御一座の姿となれり、天正十四年七月島津氏の兵燹に罹り、神人離散し社頭轉々荒涼たり、爾來小早川黒田兩家により、僅に造營維持するを得たりしも、又昔日の觀なし、明治四年六月國幣中社に列せられ、同十八年四月二十七日官幣大社に昇格せられ、同三十一年追遠會を起して舊觀に復せん事を企て、同四十年造營功を竣へ、輪奐の美を盡すに至れり、大正四年十一月十日、大正天皇御即位の當日、仲哀天皇の神靈を古宮より御遷座仰せ出され、神功皇后と御同座に奉齋せしめ給ふ、即天皇皇后御並座以來、御神威益赫灼として、皇室並に一般の崇敬大に加はり、賽者踵を接するに至れり、社前門下に頗る繁茂せる一大老杉あり、神木綾杉と稱す、其傍に建てる綾杉の記に曰く、

神功皇后三韓征伐御凱旋の砌、御劍、御鉞、御仗の三種を此地に埋め、御標にとて御

鏡の袖なる杉枝を挿させ給へるが即此樹なり、後御神託に、吾神靈を此の杉に留めて本朝を鎮護し、敵國を降伏せしむべし、殊に世人杉の樹の如く、直き心以て世に務めなば、吾必ず其人を守らむと誨へ給ひて御神木となれりと、此の樹常に異なりて、其葉恰も海松房の如く、交葉綾の紋の様なれば、綾杉の名あり、此の杉は根より芽を生し、親木枯るれば直ちに後繼となることを得、故に古より植繼ぎたることなし、眞に比類なき靈樹なり。

社傳に、人皇四十八代稱徳天皇天平神護元年、始めて此の杉の葉に守札と不老水とを添へて朝廷に奉りしより恒例となり、明治維新に及べり、又太宰の帥に新任の人必ず當宮に參り、其際神主この杉の葉を帥の冠に挿すこと古實となれりと、かゝる由緒ある樹なれば、之を詠し歌多く、代々の勅撰集に見ゆ云々。

正和天正の頃、屢兵燹に罷りしも、焦土の中より萌芽を發して生育繁茂せり、明治十一年春、陸軍大將有栖川宮殿下の御染筆を仰ぎ、石に刻して樹下に建てたる碑石に、

千早振香椎の宮の綾杉は神のみそきにたてるなりけり

とあるは、新古今集に見えたる歌なり、

古宮趾は、仲哀天皇の神廟の在りし舊蹟にして、本宮の東一丁計りの處にあり、天皇

崩御の砌、皇后躬ら天皇の御靈を奉齋し給ひし靈地にして、所謂最初の香椎廟なり、故に香椎廟と申せば、此古宮と皇后の御宮と一所二宮を稱へしものなり、依つて朝廷の御崇敬は、兩宮とも同様に、祭祀も亦嚴重に執行せさせ給ひしが、中世以降、兵革の爲め、天皇の神廟は漸次衰頽し、大正四年迄は攝社の格にて在せしは寔に恐懼に堪へざる所なり、然るに前述の如く、同年十一月十日、御勅旨に依り、天皇の御靈を本宮に奉遷し、今は其趾のみ残り。

社頭の感

神々のみいつによりて韓國カウクニの

草木もなひきふしてけるかな

五 箱崎八幡參詣

香椎神宮を辭し、復自動車を驅り、多々良川を渡りて箱崎町に着し、官幣大社箱崎宮に詣す。

當社は應神天皇、神功皇后、玉依姫の三柱を祀る、世俗宇佐、男山と共に日本の三八幡

宮と稱す。

「敵國降伏」の勅額を仰ぎつゝ、樓門を潜りて拜殿に稽首し、現時の敵國降伏を祈りけり。

寶物殿に入りて、御醍醐天皇奉獻「敵國降伏」の御宸筆を始めとし、種々の社寶を拜觀せしが、其説明書によれば、樓門に奉掲せる勅額は、此御宸筆を擴大して彫刻したるものなりと云ふ。

本殿に向ひし右側に、玉垣を以て圍まれたる老松あり、箱松又は標しんぼうの松と云ふ、之れ應神天皇蚊田の里に御降誕あらせ給ひし時、其御胞衣を埋められたる神靈の地なるを以て、其標に松を建てたりしが、爾來之を標の松と稱するに至りしと云ふ、亦當社を此地に建てられたるも、此由緒あるが爲めなりと聞けり、新拾遺集に、跡たれて幾世經ぬらん箱崎の標の松も神さびにけり」と詠せる歌あり、即此松の事なりとぞ、樓門にて記念撮影をなす、之を今回旅行中初めての撮影とす、蓋下關を始めとし、門司小倉に至る迄、皆要塞地帯として撮影禁止區域に屬しければなり。

八幡宮を辭して博多に赴き、福岡市東公園所謂千代の松原に至り、龜山上皇、日蓮上人の巨大なる銅像を拜し、元寇當時の戦利品其他の記念物を展觀す、館内の楯間に

は同役の戦況を描きたる油繪の額十數枚あり、其内には我遠祖河野通有が胡艦に飛入りて奮闘せる場面もありて、當時の状況躍如たり、館内にては之を繪葉書に縮刷して賣鬻せり、仍て記念にもと十數組を求めて館を辭す、聽て館の監守追ひ來りて余の名を問ひ、且名刺を要求す、余其理由を問へば彼曰繪葉書を如此多數に求めたる人は自分當館の監守受任以來嘗てなき所、故に之を尋ぬるなりと、余笑て答て曰、抑もく、余は此油繪にある河野通有の末裔に屬するものなり、故に記念に之を購ひ兒曹に分與して以て其教育資料に供せんとするが爲めなりと、彼欣肯して去る。

夫れより海岸を逍遙したる後、西公園に向ふ。

元寇記念館にて

神風に吹き拂はれしあた浪の

あとしつかなり千代の松原

六 福岡見學

自動車を驅りて、博多福岡の境なる那珂川を渡り、往昔黒田長政の築設したる舞鶴城の舊趾を左に眺めつゝ、西公園に達し、其丘上に登れば、博多灣を脚下に千代の松原、海の中道、玄海殘の島など、灣内の勝景を一眸に收む。

園内には縣社光雲神社あり、又明治維新の志士平野國臣の銅像建てり。

光雲神社は、舊藩祖黒田孝高、長政の兩公を祀る、光雲の名は兩公の法號龍光院、興雲院の各一字を採りて名づけたりと云ふ。

平野國臣は通稱次郎、大中臣姓にして月廼舍、柏舍、友月菴等と號し、後獨醒軒と改む、福岡藩士なり。

夙に國事を慷慨して尊王の大義を唱道し、澤宣嘉を奉じて、生野銀山に義旗を揚げしも、事敗れ、遂に幕府に捕はれて元治元年七月二十日斬に處せらる、年三十七或は四十三とも云ふ刑に臨みて詩歌各一首を賦す。

詩に曰 憂國十年、東驅西馳、成否任天、魂魄歸地、

歌に曰 見よや人あらしの庭の紅葉は、何れ一葉もちらずやはある。

明治二十四年四月正四位を追贈せらる。

西公園を出で、土産物店に入り、博多人形等を求め、自動車に復して九州鐵道電車

驛に向ふ。途次福博電車の終點今川橋停留場附近に、貝原益軒先生の墓ありと聞きしも、日暮れて參詣することを得ざりしは頗る遺憾なりき。

七 太宰府見學

午後六時半急行電車(九州鐵道福岡久留米間)によりて太宰府に向ふ、午後七時二日市着、出迎の自動車に搭して武藏温泉に赴き、延壽館に泊す。

武藏温泉は俗に湯町と云ひ、天拜山の麓にあり、此旅館は昨年熊本地方に於ける陸軍大演習に際し、朝香宮殿下の御宿泊に充てられたりと云ふ、其際新設せる特別の浴室あり、其浴槽は特に殿下の爲めに適する様、構造せしとの事にて、仰臥して沐浴し得べく、且つ頗る清楚にして大に爽快を感ぜしむ。

三日午前九時、旅館を發して太宰府町に赴き、順路先づ觀世音寺に詣す。

當寺は今を距る千二百五十餘年前、天智天皇が御母齊明天皇を御追福の爲め創建し給ひし靈場にして、清水山普門院と號し、塔堂輪奐の美を極めたりしが、今は其面影なく、古色蒼然たる佛堂と、千歳の餘韻を傳ふる古鐘の存するのみ、寶庫を參觀するに、佛像其他國寶となりたるもの尠からず、本堂の扁額「觀世音寺」の四大字は、小野

道風の書なりと云ふも、實は其模寫にして、原物は寶庫内に收藏せり。

鐘樓に吊るせる梵鐘は、左記菅公の詩によりて古來其名高く、今や國寶として保存せらる。

一從貶謫就柴荆 萬死兢々踟躕情

都府樓纔看瓦色 觀音寺只聽鐘聲

中塚好逐孤雲去 外物相逢滿月迎

此地雖身無檢繫 何爲寸步出門行

觀世音寺の隣に亦古色蒼然たる伽藍あり、觀世音寺の住職に其寺名を尋ねれば、之は戒壇院とて日本三戒壇の一に屬し、有名なる寺院なりと云ふ、仍て歩を移して之に參詣すれば、本堂に金色燦然たる三大佛像安置せらる。

由來記によれば、當寺は聖武天皇の詔勅に依り建立せられたるものにして、觀世音寺法塔四十九院中殘存せる唯一のものなり。

當寺は奈良東大寺、下野藥師寺と共に、日本三戒壇と稱し、天平勝寶五年、唐の鑑真大師を勸請し、始めて授戒したりと云ふ、戒壇とは即ち授戒道場の義にして、古昔は此授戒を了したる緇徒に非ざれば、寺院の住職たるを得ざりしと云ふ。

本尊の盧遮那佛、兩側の彌勒菩薩、文珠菩薩は何れも國寶なり。當寺の庫裡は、相當廣濶なるも甚しく頽廢せり、又堂後に仙厓和尚の舊庵あるを見落したるは遺憾なりき。

同寺を出て、西すること約二丁にして、大宰府址及都府樓址に至る。

大宰府は宣化天皇の御宇、西海統治の爲め設けられたる行政廳にして、都府樓は天智天皇の御宇、唐韓兩國の使節を接待する正廳として建てられたるものなれども、今は其礎石を残すのみ、地を掘れば盛に瓦片出つと云ふ、菅公の詩に都府樓纔看瓦色とあるは即之れなり。

樓址の中央に太宰府碑建てり、其撰文及書者は、福岡の人龜井南溟先生なり、文に曰く、

昔郡縣爲治本藩置太宰府與奥鎮守府對峙東西布政牧民且備外寇制甚祺重但以大宰府兼統百濟唐山渤海等使文武具官

册名 親王主帥之非如奧專用武即以權帥大貳來蒞若黃備大江二公其最著福矣若乃菅公以右大臣左遷權帥蓋異數云菅公既以讒至此悒鬱不樂遂薨而葬焉實安樂寺及天誘其衷京師亟災

天子動心感悟其非罪追贈旌德祠而祀之寵之四方今太宰府顯矣菅公有詩曰都府樓唯看瓦色說者謂言樓已廢圯惟古瓦供器甃猶未央銅雀比也或謂不然有樓而不登獨望見其薨述幽閨不出門也不則其對曰觀音寺只聽鐘聲何以爲說二說未知孰是要之菅公即世業已八百有餘年而大宰府之作未知前菅公幾百閱歲則禦寇所謂如存如已者誰得而詳之余獨悲菅公以太宰府大顯而太宰府爲菅公掩人知以詩珍其瓦而不知其詩以瓦傳壘闢其墟泯滅殆盡豈菅公之意乎先儒貝翁篤信作方志至府舊址考索詳甚猶可頤指而箸數然以我心之戚々推翁之紀載詳如彼翁豈獲我心于百年上者非耶何以存舊址垂諸無窮樹石畧記顛末且銘之若其地方面名稱等方志盡之不復贅焉即移舊礎三枚布列碑前庶存古也伏惟當今封建國邑名器非古以我先侯有大勳勞于慶長間享封 本藩仍

命兵備西南蠻夷奕葉守職而海不揚波奧大國也大小諸侯封疆相接俗又驍賊何有於毛人蝦夷夫世遷物換天之數也唯能納民帆物置天下磐石上無古今一已於乎盛矣哉

銘曰 蕩々大礮 皇靈收躡 八挺環海 一嶽柱天 孕珠毓金 山媚水鮮 與鎮東北 巖邑綿延 命筑與肥 控制戎蠻 蠻舶越船 出沒如煙 賄貨藏福

重譯通津 鎮臺嚴備 鯨鱗股鱗 觀時開務 宜稽古賢 都府存蹟 片石屹然
 周文服事 商鼎不遷 宇宙自若 帶礪恒新 百王一姓 千億萬年
 寛政紀元歳次己酉冬十一月

北筑福岡府甘棠館祭酒龜井魯道載父謹撰

都府樓草庵にて、樓の瓦片並に瓦の模型を求めて出づ。

道を轉じて天満宮に詣て、唐銅造の大鳥居を潜り、心字形の池に架せる反橋を渡る、正面の樓門を通過して本殿に稽首し、兒等の文運を祈る、廟前に老梅あり、柵にて之を圍み、標札を建て、飛梅と號す、傳説によれば之れ菅公が九州に謫せられ、京師の邸を去るに蒞み、日夕愛玩せし庭前の梅樹に向ひ、東風吹かば香おこせよ梅の花、主人なしとて春な忘れぞと契られしが、其梅後年主を慕うて此地迄飛移れりとして此名ありと云ふ。

社殿後方の神苑は、梅林にして開花の季節には香氣馥郁として神靈を慰するなるべし。

當社の沿革によれば、延喜三年二月廿五日、菅公謫居の地榎寺に薨ずるや、柩車安樂寺の地に至り、止りて動かさず、仍ち此處に葬り奉りて聖廟と稱す、延喜五年八月初め

て神殿を設く、寛弘元年二月廿五日勅祭あり、爾來年々同日を以て勅祭を行ふを例とす、明治四年國幣小社に、同十五年官幣小社に、同廿八年官幣中社に、列格仰出されたり、現今の本殿は大社流破風造にして、大正十九年小早川隆景、五ヶ年の星霜を費し、造營せしものなりと云ふ、明治四十年特別保護建造物に指定せらる。

飛梅の前にて

はるくゝとあるし慕ひて咲きとひし

梅が香かきよし太宰府の庭

飛梅の前に立ちて記念の撮影をなし、社務所にて管公像、護符神授筆等を求めけるうち、早や汽車の時刻切迫しければ、駆足にて急ぎたり、途中中小倉工場次長小林君の參詣するに邂逅せしも、僅に一語を交換するのみにて自動車に復し、二日市驛に急走せしが、幸ひにして汽車豫定より遲着せし爲め、當日の行程に違算を生ぜしめざりき。

プラットホームに出づれば、正面に天拜山を望む、傳説によれば、菅公謫居中此山の頂上に於て冤を天に訴へしことありと云ふ。

つみとがもなき身は神にいのらずも

おのづとはる、峰のくる雲

八 長崎見學

午前十一時八分の定刻を遅るゝこと十數分にして、二日市驛を發し、鳥栖にて長崎行急行列車に乗換へ、午後零時十分同驛を發す、佐賀驛を経て久保田驛を通過する頃、路傍に東肥板紙會社の工場を望見し、次て牛津驛を通過する頃、又路傍に牛津板紙會社の工場を望見しつゝ、走る、此兩社は何れも知人の經營にかゝるものなり。有田驛附近に至れば、路傍の山上に、柿右衛門電の標札立てるを見る、初代名工柿右衛門の苦心談は、嘗て傳聞せるところ、或は亦演劇「陶工柿右衛門」を見たることありて、懷舊の感に堪へず。早岐驛を過ぎ、大草驛に至る頃迄、大村灣を右に眺めつゝ、其沿岸を走り、午後三時卅二分長崎驛に着す、直ちに萬歳町上野屋旅館に投し、少憩の後自動車を驅りて市内を視察す、先づ上西山町の山上に鎮座せる國幣中社諏訪神社に詣す、青銅の大鳥居

を潜りて石磴を登ること數十階、氣息奄々たり。

拜殿に賽し、拍手禮拜す、兒等は當社特有の英文神圖を引きて聊か其占文を解するものゝ如し。

當社は健御名方大神、八坂刀賣大神の兩神を祀る。

當社の由來を聞くに、慶長の頃耶蘇教徒横暴壓迫の行爲多く、爲に神社の廢毀せられんとするを憂へ、當社初代の宮司青木賢清具に辛酸を嘗めて之に對抗し、寛永元年丸山の地に齋祀せしが、後幕府の助力を得て現在の地に遷座し、鎮西無比の社殿を建設せしものなりと云ふ。

境内に連なりて諏訪公園あり、市内の展望最も佳なり。

諏訪山に登りて見れば長崎の

みなとも町も一目なりけり

公園を降りて鳴瀧町に至り、シーボルトの宅址を訪ふ、此地は文政六年の昔、來朝せし最初の蘭醫「シーボルト」が學舎を建て、醫學及び博物學を講したる所にして、我邦西洋醫學の發祥地なり、邸址内に同師の銅製胸像立てり、宅址は往年史蹟に指定せ

らる、入口に建てられたる由來書左の如し。

シーボルト宅址

シーボルトは文政六年(一八二三年)出島蘭館の醫官として渡來せしが、後楠本タキの名義を以て此地を購入し、官許を得て屢此地を訪ひ、醫學及博物學等を門生に教授せしかば、天下の雋秀此處に集り、我邦に於ける西洋學術の搖籃地となりたり、井戸の傍に一奇木あり、シーボルトの木と稱す、此井戸前に平家造の住宅、今一の井戸前に二階建の書齋ありて、庭園には種々の植物を栽培したりと云ふ、安政六年再渡來の時も亦一時此處に住居したり。

大正十一年十二月 内務省

新しきくすしの道を傳へ來し

名はひく、なり鳴るたきの里

シーボルト宅址の後丘は、長崎開港以前、長崎氏居城の舊址なりと云ふ。歸途電車道に出て、酒屋町邊より左折して眼鏡橋を渡り、崇福寺に向ふ。此眼鏡橋は寛永十一年明僧如定の架する所にして、長崎に於ける石橋の嚆矢なりと云ふ。

懸て崇福寺の門前に着す、其門恰も畫かける龍宮城に似たり。

當寺は寛永六年(約三百年前)明僧超然によつて開基されし黃蘗の寺院にして、今籠町にあり、當初は唐船の海上安全祈願をなす道場なりしと云ふ、堂宇其他皆特別保護建造物なり。

本堂の前に巨釜あり、口徑六尺一寸、深五尺七寸にして、一度に米四石二斗を炊くに足ると云ふ、此大釜は天和二年(約二百四十八年前)長崎地方に大饑饉ありし時、住職千凱和尚が私物を替へて鑄造せしめたるものにして、和尚は托鉢して得たる米を此釜にて粥となし、之を饑民に施したりと云ふ。

慈悲深き彌陀のちからに諸人の

なさけあつめし大かまのそこ

本堂に詣すれば、時既に薄暮に迫り、堂内暗黒にして、本尊はもとより有名なる羅漢の木像も判明ならず、只闇中に向て唱名禮拜するのみなりき。

龍宮の城もかくやとぬかつけば

乙姫ならぬほとけまします

山門を出て更に車を走らせて、丸山町を左に眺め、昔頼山陽が長崎來遊中、寄寓せし花月樓は此突當りの家なりと、運轉手より教へられつゝ、進んで南山手町に至り、カトリック教會の大浦天主堂を訪ふ、屋上を觀れば、金色の十字架は燦然として輝き、日本のマリアと題せる石像は堂前に立ちて信者を招くが如し、信者の案内にて、堂内を一巡すれば、舊臘降誕祭に飾付けたる、基督一代の小パノラマ、未だ其儘存置しありて大に美觀を添へたり。

きりすとの教の道を我國に

ひろめそめしもこの家なるか那

歸途海岸通に出て、我邦最初の互市場兼外人居留地たりし出島附近を眺めつゝ、長崎驛前に出て、日全く暮る、此處より逆行して今町文明堂本舗に至り、「カステラ」を求めて旅舎に歸る。

文明堂本舗に赴かんとするに當り、自動車の運轉手余に注意して曰く、長崎「カステラ」の原祖は福砂屋なれば、土産ならば同店にて買はるゝこそ然るべけれど、余曰余は敢て「カステラ」を買ふことを主たる目的とするにあらず、實は余の東京住宅に近接せる麻布笹笥町に、文明堂の支店ありて、時々同店より之を購求することあり、且つ同店の兒女と余の兒女とは琴友たる等の關係あれば聊か好奇心によりて其本店を訪はんとするに過ぎずと、今其店舗を見るに、其構造裝飾等本支店全く其軌を一にせり、折柄同店にては福引景品付にて新年の賣出中であり、余にも亦其抽籤券を呉れたるも、抽籤期は即時にあらずして尙旬日の後なれば、折角なれども江戸から長崎まで抽籤に来ることも叶ふまじとて、辭退しけるに店員は然らば當日代理にて抽籤し、當れば郵送すべしと云ふに任せ、之を預けて歸る。

旅舎に復りて休息早寢し、井澤君は終列車にて小倉に歸る。

四日拂曉旅舎を出て、午前七時發の列車にて熊本に向ふ、鳥栖にて乗換へ大牟田附近に至る頃、車窓近く温泉岳を望みつゝ、進む。

九 熊本見學

午後一時廿六分、上熊本驛着、直ちに自動車走らせて本妙寺に詣す。

當寺は發星山と稱し、日蓮宗の巨刹なり、加藤清正未だ大阪に在りしとき、父清忠冥福の爲め日眞上人を開山として、之を建立し、後肥後國主となるに、及び之を熊本城内に移せしが、後裔忠廣の代に至り、再び之を現在の所に移設せしと云ふ。

樓門を潜り、院坊兩側に並び立つ櫻並木の參道を進み行けば、數百級の石燈あり、其路傍には大小の石燈籠幾百となく立ち並び、又蠟燭線香土產物等の賣店を始め、本妙寺名物田樂めし、旅舎等軒を並べたり、之を登り詰めし處に、清正公の靈廟建てり、廟前には香煙濛々として立ち罩め、燭火絶ゆることなく、參詣人の題目を唱ふる聲之に和する太鼓の音聊か喧囂を感ぜしむ、廟の北側には公に殉せし大木土佐、南側には同じく殉死せし朝鮮人金官の墓あり。

庫裡にて集印帳に押印を乞ひけるに、寺職のもの永運講に入會せんことを勸進す、如何なる趣旨かと問へば、當寺の保存會なりと云ふ、仍て短期の會員たることを約す。

途を轉して花岡山に登り、俯瞰すれば市中一眸の下にあり、此岡は熊本驛の西北に聳ゆる丘陵にして、高さ僅に五十八間に過ぎざれども、眺望の佳なること、市内第一と稱す、丘上には櫻樹多く、中腹の官軍墓地には、明治九年神風連の亂に斃れたる將卒の墓あり、又明治十年西南の役に、薩軍が熊本城を砲撃せし時は、此處に砲兵陣地を布きたりと云ふ、頂上近くに鐘懸松と稱する一株の老松あり、之れ清正が築城の際、此松に鐘を懸け撞き鳴して、役夫の始業休息等の合圖に用ゐたるものなりと傳ふ。

丘上より遙に東方を望めば、阿蘇山の噴煙濛々たり。

遠山にたなびく雲はおそろしき

阿蘇が根にはくけむりなりけり

丘を降りて自動車に復し、熊本城址に向ふ、途中唐人町と稱する商店街を通過しけるが、此處は文祿の役、清正朝鮮より凱旋の時、隨從し來りし鮮人の移住せし所にし、即ち此名ある所以なりと云ふ、進んで新市街と稱する所に至れば、市役所、遞信局、公會堂、專賣局、勸業館等近代的建築の廳舎に立ち並べり、此處を過ぐれば、早や熊本城址なり、城址への登口を行幸坂と云ふ、明治卅五年秋季特別大演習の際、行在所を城内の第六師團司令部に置かせらるゝにあたり、峻坂を改修したるを以て、斯く名づけたりと云ふ、兩側に櫻樹を並植し、春季櫻花の名所たり、坂の右傍に西南役の勇

士谷村計介君の銅像建てり兒等敬仰記念の撮影を爲す。

蟻さへもくゞる道なきかこみをば

ときしいさをの人のすかたぞ

宇土櫓の頂上五階に上りて市内を展望し、又各階に陳列せる當城の舊繪圖、西南役に於ける官熊薩諸將の寫眞、各方面の展望見取圖、其他刀、劍、武器等を展觀して出づ。當城は大阪、名古屋の兩城と共に、我國三名城の一と稱せらる、其創設は應仁文明の頃にして、菊地氏の一族出田秀信なるもの、始めて千葉城を築きたるにあり、後關ヶ原戰役の翌年、即今を去る約三百三十餘年前に、清正六年の日子を費して之を改築したりと云ふ。

清正手植の公孫樹、城内に残存するを以て、一名銀杏城とも號す、後細川侯之に代りて明治維新に至りしが、明治十年西南役の兵火に、櫓樓悉く燒失せしも、第三天主閣、宇土櫓のみは其災を免れ、籠城五十有餘日、悲壯なる史蹟となりしなり。

宇土櫓の左方、即ち師團司令部の前に、午砲臺あり、亦四方を展開し、市街を俯瞰するに適恰す。

城址を出て、其北隣京町口の、小丘に鎮座せる加藤神社に詣す、祭神は清正公にして縣社なり。

當社は初め本妙寺の境内にありしを、明治四年神佛分離の際、熊本城内に移され、後更に城外現在の處に遷座したるものにして、錦山神社と稱せしが、清正公三百年祭のとき、加藤神社と改めたりと云ふ。

神社を出でて、坂路を降り、内坪井町に醫學博士小宮悅造氏を訪ふ、同氏は熊本醫科大學教授にして、其令夫人重子女史は、余と同郷の先輩故工學士吉本三次郎氏の二女なれば、久瀾を敍せんが爲めなり、時間を急ぐ爲め、玄關にて博士夫妻を始め、令息令嬢等にも面會し、直ちに辭去す、余は前日長崎より電信もて訪問を豫告し置きければ、博士は熊本驛迄出迎はれたるよしなるも、余は熊本驛に下車せず、一驛前の上熊本に下車したるを以て、遂に博士の好意を徒勞に歸せしめ、甚だ恐縮に堪へざりき。

車を走らせて水前寺公園に至る、園内に入れば、富士山に形とりたる芝山、清水のぶく／＼湧出せる池、樹林、飛鳥、苔蒸せる岩など、巧妙なる配置により、純日本式庭園の妙趣を呈す。

當園は寛永九年、舊藩主細川忠利卿茲に水前寺を建て、後寺を他に移して、其跡に藩公遊休の「御茶屋」を營み、成趣園と稱せしものなるが、世人此本名を稱せず、水前寺公園を以て其通稱となせりと云ふ、尙園内には縣社出水神社あり、舊藩主の中祖藤孝卿號幽齋及其子忠興卿號三齋を祀る。

以上を以て熊本市内、重なる史蹟名勝の見學を了し、水前寺驛より別府に向ふことす。

水前寺驛は熊本より大分に至る豊肥本線に屬し熊本、春竹の次にあり。

午後四時四十九分、同驛を發し、數驛を経て立野驛附近に至れば、此處より登りては戻り、戻りては亦登ること、恰も信越線の碓氷峠附近に於けるが如し、益登りて宮地驛に着す、此處は阿蘇山の直下なれども、惜しい哉、暗夜にて靈山の威容を望む能はず、只模糊たる輪廓の暗空に浮べるを見る。

更に進んで竹田に着す、此處は南畫の泰斗、田能村竹田翁、同直入翁、及軍神廣瀬中佐等の生地にして、竹田翁の墓は町の西端胡麻生丘にありと云ふ、參詣の時間なきを遺憾とす。

彌進んで大分に着し、此處より別府灣の夜景を眺めつゝ、進み、午後十時五十二分漸

く別府驛に着すれば、圖らざりき「プラットホーム」には井澤君、旅舎の主人と共に來り迎ふ、即ち共に自動車に搭し本町米屋旅館養壽莊に投し、一浴して直ちに寢に就く。聞くところによれば、余の同族一柳直徳子爵も、亦嘗て此家に宿泊せしことありと云ふ。

十 別府温泉地獄廻り

別府の温泉地帯は、西南北の三面に亘りて丘陵起伏し、海拔四千六百尺の鶴見山は、白煙を噴きつゝ、巍々として中空に聳え、東方一面は鏡の如く靜なる別府灣に臨み、頗る景趣に富めること、今更云ふまでもなし。

温泉の泉質は所によりて異なるも、概して炭酸泉、鹽類泉、鐵類泉多く、硫黄泉は稀なるが如し。

而して所謂地獄とは、窪池に熱湯熱泥湧沸し、或は猛烈なる蒸氣を噴出する處にして、此地帯一周の距離約四里、徒歩にて五時間、自動車にて約二時間を要す。

五日早朝、食事前に、地獄廻りを爲すべく、自動車を驅りて白砂青松の海岸に沿ひ、龜川に出て、左折して血の池地獄に至る、池は赤泥にして蒸氣濛々として昇り、時々霧

々たる音響を聞く、全池赤泥なるを以て血の池と稱するものゝ如し。次に坂路を昇進して坊主地獄に至る、灰色の泥池にして、全面沸然として泡を噴出す、泡圓きが故に此名ある所以なるべし。更に進んで海地獄に至る、紺碧海の如き大池は、白氣濛々たる大熱湯を滿溢す、景趣最も雄大にして、地獄中の冠たるものと云ふべし、池畔に良子女王殿下御遊覽記念の標柱建てり。

茶亭に少憩し、試に鶏卵を池湯に浸せば、暫にして煮熟す、其熱力思ふべし。尙進んで、鬼地獄通稱八幡地獄に至る、灰色の泥池に蒸氣の噴出すること、他の地獄に異ならざるも、此處にて最も珍奇とするは、大鬼の遺骸と稱するもの之れなり、勿論加工したるものならんも、立てる骸骨は頗る巨大にして、其顔面の骨相描ける鬼面に酷似せり、此處の湧出泉は、神経痛、痲痺質斯等の局部に塗布すれば、鎮痛即功ありと宣傳し居れり。之れにて地獄廻りを止め、歸途に就く。

湧きいづる湯の名を聞くも恐ろしき

血の池地獄鬼地獄とは

途中石垣原の古戰場を過ぐ、此處は慶長五年の秋、中津城主黒田如水と大友義統の兩軍、互に力戦したる史蹟なりと云ふ。附近に九州帝國大學溫泉治療研究所、京都帝國大學地球物理學研究所等の廳舎建てり。

旅舎に歸りて朝食を喫し、直ちに別府驛に赴き、午前九時十七分發、宇佐に向ふ。

十一 宇佐神宮參詣

午前十時十分、宇佐驛着、自動車を驅ること西南約一里餘、八幡宮に着す、神苑を徒歩すること約數丁にして社頭に達す、社は小椋山の丘上にあり、後方に馬城靈峰(大元山)を負ひ、前方に豊前平野を控へて遙に瀬戸内海に菴めり。

由來書によれば、祭神は一之御神、二之御神、三之御神、比賣大神、三之御神、神功皇后の三柱を奉祀せりと、往古より朝廷の崇敬甚だ厚く、伊勢神宮と並び稱して、二所の宗廟と崇め奉り、歴代の御即位には奉告の勅使あり、又大神寶使を差遣

せられて、寶祚の長久を祈られ、外寇、天變、地異、其他國難ある毎に、退穰を祈り奉り、且三年毎に奉幣使をも差遣せられたりと云ふ。社號は往古は宇佐宮、後八幡宇佐宮と稱せしも、明治四年五月官幣大社に列せられ、同年六月宇佐神宮と稱へ奉るに至れりとぞ。當社は神護景雲三年、和氣清麿公神勅を受けられ、皇祚の異變なきを得たるによりて、其名殊に著しきことは、何人と雖も之を知る所にして、今此社頭に立ちて感慨實に無量なりき。

大内の空を蔽ひしむら雲も

神のみいつに消えてあとなし

神丘を降りて寶物館を參觀するに、應神天皇御表袴を始めとし、刀劍其他枚舉に遑あらず、就中最も目新しきは元内務大臣鈴木喜三郎氏の献納せる飾劍なりき。神苑を出て、清麿公の記念碑ありと聞き、此處彼處を搜したるも見當らず、最後に遙か彼方の丘上にあると聞きたるも、途聊か遠く、且つ時間なければ、遺憾なれども之を中止し、境内にて公の塑像を求めて歸る。

境内を辭し、自動車に復せんとするに在らず、運轉手に托し置きたる行囊等、他の自動車の外側に放置しあれば、其車の運轉手に交替せしやと問へば、否らず暫く預りたるまでなりと答ふ、仍て之を回收し、茶亭に休息して暫く其至るを待ちたるも、來らざれば、己む無く他の自動車を雇はんとし、茶亭より交渉せしめ居る内、漸くにして至る、大に其不都合を詰責すれば、彼急用出來申譯なしとて叩頭するのみ、思ふに余等參詣に時間を要せし爲め、其間を他に利用せしもの、如し斯くて汽車豫定の時刻も空しく過ぎければ、宇佐驛に戻ることを止め、此處より直ちに中津に向ふこととす。

時に禮装せる人々並に警官等多數集合し、此處彼處に整列せり、或は大臣の參詣にもやあらんと尋ねれば、大分縣警察部長の參詣するを出迎へるなりと云ふ、乃ち知る警官の多數徘徊せるは之れが爲めなることを。中津に向ふ途中に小都市あり、四日市と云ふ、四日市は伊勢にのみありしと思ひしは實に井底の蛙なりき。

十一 耶馬溪探勝

午前十一時半頃中津驛前に着す、耶馬溪鐵道會社經營の自動車に乗換へ、耶馬溪に向ふ。

耶馬溪は云ふまでもなく、英彦山に源を發する山國川の流域十三里に亘る峡谷の總稱にして、舊耶馬、深耶馬、裏耶馬の三大溪より成る。舊耶馬は青の洞門及羅漢寺附近より、耶馬溪鐵道守實驛方面に至る鐵道沿線一帶の峡谷にして、山陽の耶馬溪と命名したるは此邊を稱するもの、其深耶馬裏耶馬は近世に至り命名したるものなりと云ふ、而して耶馬溪は、此三溪を見ざれば、其真趣を語る能はずと聞けども、余は時間なき爲め舊耶馬溪の内、羅漢寺參詣に止むるの外なかりしは遺憾とするところなり。

中津を出て、途中より遙か左方の天空に鶴見岳、由布岳(一名豊後富士)等を眺めつゝ、走る。

(イ) 鶴市二靈人柱記念碑

山國川の河岸に出づれば、此に大なる記念碑建てり、題して鶴市二靈人柱記念碑と云ふ、此處は三口堰のある處にして、保延年間、湯浴彈正基信の家臣、古野源六兵衛重定の娘お鶴及び其子市太郎の親子、三口堰石の人柱に立つの事ありしかば、里人之

を祀りて鶴市神社と稱し、又近年此記念碑を建てたりと云ふ、今其由來の大意を自動車内にて運轉手より聞きたれば、聊か之を人柱由來記により、補足して左に略敘すべし。

偕ても中津平野(當時沖代と云ふ)千町歩の田畑の灌漑用水は、山國川(高瀬川とも云ふ)に大堰を設け、之より揚水するものなるが、之れ迄幾度か築き上げし大堰も、毎年梅雨季より夏にかけての大洪水に、押流されては、又水欲しい稻田の涸れるに、泣くも狂氣の様に堰き揚げねばならぬ、大切なる命の堰なりしが、保延元年(距今七百九十二年)八月の頃、出初の洪水にあまたの人の力によりて固めたる大堰も、半ば押流されて、憐れにも其復舊工事を急がねばならぬ時に當りて、此難工事を監督せる地頭湯谷彈正基信は、或る夜同僚に告ぐるに、昨夜夢に神勅を受けたることを以てし、斯かる人力の及ばぬ難工事には、人柱を立つる必要あり、且つ自ら其任に當らんと提議せり、此に於て六人の同僚、其議には賛したれとも、各其犠牲者たらんことを争ひければ、基信更に告ぐる様、拙者年老いたる爲め、大切なる一事を方々へ云ひ洩らしたり、其人柱に付ては、昨夜夢の神意に、地頭七人相集まり、小島の男淵に其穿てる袴を浮べよ、真先に沈みける袴の主こそ、神靈の御意召

す人の身なり」とあり、斯く御神勅確なる上は、最早方々には異存よもあるまじと云ひければ、一同も此議に賛し、然らば今宵傾けとも、明月の光を幸ひ、此れより打ち立ち河を廻り、一刻の内にも、神意の宿る身を確め申さんとて、豫て主人の身を案じて、待ち居りし基信の家臣、古野源六兵衛の水慣棹にて、一同小舟に乗り、神意の指示せる河面に至りて、地頭七人袴流しをなしたる結果は、神夢の當人基信が神慮に適ひ、三口堰の人柱となることに決定せり。

而して其夜、源六兵衛の宅には、其子お鶴と孫市太郎の二人淋しき留守を守りけるが、お鶴は今年三十五歳、不幸にて早く夫に死別し、其遺児市太郎を愛育しつゝ、暮しけり、市太郎は此時十三歳なりけるが、此親子兩人は源六兵衛の身を案じながら、其歸るを待ちける中、源六兵衛は黎明間近き頃、漂然歸宅しける其様子の常ならざるを見て、親子は左右より取継りて其事情を尋ねけるに、源六兵衛は今宵地頭七人衆協議の事より、主人基信が人柱の犠牲に決定したる始終を語り、且つ主人の爲め、自身代りに立つべき覺悟を告げ、再び主人の邸へ赴きけるが、お鶴は乍ち小刀を以て、己の腹部を刺し、驚く市太郎に告げて曰く、今爺様より承りし今度の話に、爺様は健氣にも御主家の身代りになるとの御決心、されど、爺様はお

命長らへば未だ、御主家へ奉公の出来る御身なるに、女の此身は世にあつて甲斐なき身なれば、御主家様と父上様の身代りになつて、あの人柱に立つ決心、然し女の身にては、所詮普通のお願ひにては聞き入れらるまじと思つて此の自害、斯くして生くる望みの緒を絶ちてお願ひ申さば、よもお取上げにならぬことあるまじ、其方は母に代つて生き残り、老い先短き爺様にまた御主家へ抜からぬ忠義を盡されよと、之を聴きたる市太郎は、是非自分も母の伴して、忠義を立てたしとて、母の側を離れざりければ、己むなく母は市太郎を伴ひて主家へ赴き、基信に向ひて懇々と志願の趣旨を申立てけり。

基信は、常に變らぬ親子の忠義は恭けれども、神慮の程も恐れあればとて之を聞入れず、源六兵衛をして之を引取らせんとす、お鶴は、では御主さまも、お父上も、この鶴を犬死させるお考かと、泣號するに、基信はお鶴の姿の常ならざるに注目し、源六兵衛をして之を調べしむれば、お鶴は自ら腹部を開きて、刀尖深き傷口を示し、到底助かるべき望なかりけり。

斯くて七人衆は、協議の上、お鶴母子忠孝の誠意に動かされたる末、遂にお鶴市太郎を身代りとして、神慮に應ずる人柱たらしむることに決定し、翌八月十五日哭

き叫ぶあまたの人々に見守られつゝ、白衣の姿神々しき母と子の尊き肉と魂は、永遠に浮ぶ瀬はなくとも、君の身代り、親に代り、亡き夫を慕いつゝ、忠孝貞の名も相應ひ、三口の堰の水深く消え失せけり。

纏て尊き其二靈を、逆手隈明神と合祀し、名を併せて鶴市神社と號し、開け行く沖代千餘町歩の水道守護の神と崇めらるゝに至れりと云ふ。

余は此悲話を聴き、其忠烈古今稀なるを嘆賞すると同時に、近代各所に屢々小作争議、労働争議等を起して、地主、事業主等を苦しむるものあるを顧み、主家に對する徳義心の甚だ稀薄となりしことを慷慨したり。

此話を聞きながら進む内、早や耶馬溪橋に着す、橋を渡りて對岸の競秀峰、青の洞門等を眺めつゝ、羅漢寺に向ふ。

(ロ) 競秀峰

競秀峰は碧水漫々たる山國川を前にして、數十丈の巨巖半空高く聳え、山容樹態幻奇を極め、耶馬三溪中屈指の奇勝と稱す、されど甲州御嶽の昇仙峽、或は上州の妙義山を見たる余の目には、左程の奇景とも思はれず、固より三溪の全部を探勝せずして、兎角の批評を下すは、甚だ失當なれども、此一景より想像するに、山陽先生の詩に

所謂峰容面而趁着殊、耶馬溪山天下無の嘆賞は、關東にも亦此奇勝あることを知らざる聊か、過當の宣傳たらざるなきやの感を生ぜしむ、之れ蓋余一人の感想にあらず、嘗て中村敬宇先生も、惜しむらくは頼山陽をして昇仙峽に遊ばしめざりしことを、若一度此地を踏みたらんには、恐らく彼の耶馬溪をして天下に誇らしめざりしものをと云へりとぞ、天下具眼の士以て如何となす、但し之れ余の觀光せる時季の適ぜざる爲めなるやも知る可らず、若し夫れ紅葉の好季節に遊ぶことあらば或は此説を取消し、地下の山陽に叩頭陳謝せざる可からざるやも斗り難し呵々。

名も高き山國川のみなかに

耶馬のたにとてほこりかほなる

青洞門は、競秀峰の直下を穿鑿したる隧道にして、僧禪海が三十餘年の努力を拂ひて完成したるものなりと云ふ、歸路に通門することゝす。

(ハ) 羅漢寺

翠川を渡りて茶亭に自動車を駐め、此處にて行厨を喫したる後、徒歩左方に屹立せる飛來峰を仰ぎつゝ、石磴を登ること十餘町、仁王門に達す、門前に茶亭數軒あり、婢

出て客を呼び、且つ大聲登攀口を案内して曰く、仁王門を潜て登れば山門に達すべく、其道容易なれども平凡なり、左方の不動坂は峻峻なれども古羅漢一帶の佳景一眸の裡に集まり、壯觀言語に絶すべく、畏くも秩父宮殿下も此坂より御登りになりました、お荷物は御歸りの節まで預りますと云ふ、成る程登口に、秩父宮殿下御登山記念と題せる碑建てり於此勇を鼓して不動坂を登る、石徑にして頗る峻峻或は鎖を手繰りて登降する所あり、或は富士の胸突八丁に類する所あり、一月の寒中なるに、流汗淋漓、氣息奄々たり、既にして天然石橋の上に達す、山川の佳景悉く眼下に集まり、眺望絶佳なりと稱すべきも、若し一步を誤らば千仞の谿谷に顛墜するを免れず。

羅漢寺の石の坂道あへきつゝ

匍ひのほりけり彌陀をたよりに

石橋を下り、手掌返しを廻れば、千躰地藏を安置せる洞窟あり、普濟樓といふ、進んで山門に達すれば、黄蘗即非禪師の筆になれる者、閻窟の木額を掲ぐ、此山門一名香雲閣と稱す、門を潜れば又大洞窟あり、無漏窟と稱し、釋尊、文珠、普賢五百羅漢等の石像

三千餘體を安置し、威容各別生けるが如く、人工の妙を極む。今此石像安置の由來を左に抜抄せん。

今を距る五百七十餘年前、京都建仁寺榮西禪師の法孫圓龜照禪師、偶當山に靈窟あるを聞知し來りて、安禪の道場を定められたり、峰巒の高き巖窟の廣き、天工自然の仙境にして、釋尊の聖跡たる者、閻窟山の洞中にも類すれば、此に十六羅漢、五百羅漢等の石像を安置して、末代の衆生に結縁せばやとの發願を爲し、假りに十六羅漢の畫像を描寫し、之を窟中の絶壁に掛けて、者、閻窟羅漢精舍と命名し、暗に尊者の應現を祈り、時節の到來を待ちたりき、其後十數年を経て、延文四年に到り、逆流建順と云へる異僧、突如として來り、師の道風を慕ひて左右に隨侍す、一見舊知の如くにして、意氣相投す、一日師に申して曰く、此の洞窟靈勝たり、五百の尊者を安置しては如何と、師手を拍つて曰く、是れ余が素願なり、乃ち共に力を協せて四方に醜資を求めしに、石材忽ち集る、此に於て二僧自鎚鑿の勞を執る、巧技妙相、其長け三尺内外、殊儀異様、凜乎として生けるが如し、五百羅漢の外に釋迦牟尼佛、並に兩脇侍、十大弟子、十六羅漢、四天王、龍王、善神等三千七百七十餘躰に及ぶ、二僧手工迅速、僅に周歲にして悉皆竣成す、延文五年十月十日を卜して、開眼供養を

行ひしに、奇異なる哉、其翌日に至り、建順は師に乞暇して曰く、吾が事既に畢る、速に往かんと、師懇留するも之を聞かず、生出入死、一往一來、朝遊東土、暮還天臺、此一偈を遺して辭去せりと云ふ(羅漢寺縁起)。

窟中清水を湧出す、之を甘露泉といふ、大旱に涸れず汲めども盡きずと云ふ、眞に靈水たるを覺ゆ。本堂即摩尼殿は、巖窟を負うて建築せられ、蒼然たる古色と共に幽寂掬すべき仙境なり。

本堂の後方なる岩石の半腹に地獄極樂を假設せるは頗る奇妙なり、小僧の案内にて暗黒なる地獄を通過し、屋上の極樂に出づ、此處には三品の彌陀を安置せり。當寺は人皇三十六代孝徳天皇の御宇大化元年頃、法道仙人なるもの、遠く印度より渡來し、諸國巡歷の際、錫を當山の靈窟に留め、常に奉持したる閻浮提金の觀音一軀を此靈窟に安置せしが、今や當山第一の國寶として秘藏せらる、之れ當山開闢の元祖にして、其後屢諸宗の高僧來りて此洞中に修禪せし事ありしも、未だ當山の伽藍を建立するに至らず、前記圓龜照覺禪師に至り始めて道場を定めたりと云ふ。尙庫裏の後方巖壁の上に、説夢堂、指月庵等ありて、何れも眺望に富めり。

千林地蔵の前にて十二支を畫がける杓子を賣るものあり、即ち各自の年支に應し之を求めて歸途に就く。

山門より表參道を降りて仁王門に戻り、自動車に復して青の洞門に至り、一時下車して洞門内を徒歩にて通過し、以て昔時此貫通工事の容易ならざりしことを偲ぶ。

(二) 洞門の由來

此洞門は、峭立せる斷崖の洞腹を穿つて路を通し、處々に窓を穿ちて光線を取り入れ、交通の便に供せるものなり。

洞門の入口には、下毛郡教育會の建設せる禪海和尚鑿道碑あり。

此隧道の開鑿は、禪海和尚の發意と、其努力に因る事固よりなれども、之には隠れたる美談の存するものあり。

青洞門開鑿由來記によれば、

享保年間、越後高田の藩士、福原勘太夫の一子市九郎、粗暴亂行の爲めに勘當を受け、其儘放浪の旅に上りしも、轉て江戸に歸り、中川四郎兵衛と云ふ武家へ奉公せしが、既に親にも見放なされ、粗暴なる男とて、主人の氣に入らず、遂に恥かしめられけるが、自分の罪を棚に上げ、却て主人を恨みし末、之を暗殺し、江戸を逃れて再び放浪の旅を續ける中、享保十九年の秋頃、遂に九州に渡り、一日宇佐八幡宮に詣

てけるが、一夜を社陵のあたりに過しける中、深く前非を悔悟して、薙髮し、名を禪海と改めて六十六部となり、心から父母及故主の菩提を弔ひつゝ、諸國を遍歴しつゝありしが、一日下毛郡桶田村青の鎧渡し(今の洞門)を過ぐるに、道狭くして岩腹を横切り、一手一足を誤まれば河中に墜つべき險難あり、而して此の鎧渡しを通行の際墜落して死傷するものに三四人あることを村民より聞きたる禪海は、積惡の前身を耻ぢて大決心をなし、之れこそ佛子の勤め、又償罪の爲にもと、衆生濟度の大誓願を發起し、即岩壁に穴を鑿ちて道を開き、以て通行人の危難を除かんと企てたり、此に於て禪海は、毎日一提の槌と、一個の鑿を以て掘鑿に従事せしが、此延長せる硬岩を、只一人の力を以て掘初めたる時は、村民皆之を狂僧として嘲笑するに過ぎざりき、されど堅忍不拔なる禪海は、村民の惡口冷評を顧みず、能く寒暑を忍び、身體の疲勞に耐へ、世の人の姿とも見えざる程になりながら、一心不亂精勵の幾年を経過する中に、狂鑿の閃は禪師の身と共に穴の奥深く侵入するに至れり、此状況を見る頃の村民は始めて其心力の不拔なる事誓願の凝固なるを知りて、最初の嘲笑を耻ぢ、果ては財を抛ち、食を送りなどして、陰に其成就を期待しつゝ、援助するに至れり。

一方江戸に於て、市九郎に暗殺されて非業の最期を遂げたる中川四郎兵衛の長子實之助は、父の討たれたる時漸く三歳なりしが、成長の後始めて父の最後を知ると同時に市九郎の非道を憤慨し、十三歳の時、柳生但馬守の門弟となりしが、年少なれども、其憤念は異常の奮勵となりて、満十八歳の時、天晴れ劍技の奥義を極むる手練者となりたりき、而して實之助は一日も早く亡父の恨を晴らさんとて、主候に乞うて仇討の免許状を受け、目途なき復讐の旅に上り、山陰山陽北陸南海を探求したる後、九州に渡り、奇しくも、十數年前禪海の詣でし宇佐神宮に參詣し、此處にて端なくも仇敵市九郎が僧となりて青村に居住せる由を聞知し、直ちに駈付けたるに、豈圖らんや、第一に聞く村人の言葉に、仇敵禪海は今村民より生佛の如く尊敬せられ、第二に居常剛邁なる面魂の敵を夢心地に想像したりしに、今目前洞窟の中、餘りに痛々しく憔悴せる敵の姿、而かも此れ世の爲め人の爲め、久しきに瀾る年月一身を捨て、精勵する必死の鑿の光を頼りに、暗黒の中に蠢く神々しき姿を見て、二十年來築き上げたる勇氣と氣力は危く一時に崩落せんとせしが、不俱戴天の仇に對し、情の爲めに望を撓くべくもあらざれば、決然覺悟を定めたりしに、其時斯くと知りたる禪海は、懸て大地に兩手を突きて曰く、自分は

往時の非義を悔い、今は既に薙髮染衣の身となりて、些か人の爲めに此事業を志し、且つ遂行の日も早や遠きにあらざれば、此處三年間我身命を自分に貸し賜へ、業成り工遂げなば、速に御身に命を捧げ申すべしと、而して又此處へ集合せし村民等も、其深き事情を聞きて共に悲み、且つ共に之を嘆願しければ、孝子實之助は、即ち其偉業の完成する日を期して、仇討を爲すべき事を約したりき、而かも斯く約束はなしたれ共、見渡す巨巖は禪海の腕の力にいつ成功すべしとも思はれず、孝子としては一日も早く復仇の望を遂げて、歸國の日を急ぐのあまり、遂に意を決して、共に暗黒の洞窟に入り、禪海の作業に協力することゝなりぬ、それより數年間、仇敵肩を並べ、鑿を交ふるに至りしなり、而して其數年間には禪海の徳と實之助の素直の心とは漸次融合し、遂には親子の如き親密の仲となるに至れり、雖て月日は流れ、彌巨巖の貫通を見るに至りしは寛永三年八月一日にして、即ち起工以來三十有餘年を過し、遂に甕々たる三百有八歩の道は、奇縁仇敵二人の手に依つて完成したるなりき、二人は相抱いて大業の成功を喜ぶと同時に、一は世の義理にも討たざるを得ざる親の復讐と、犯せし罪の消滅せず、約に基づき討たれざるを得ざる罪業を悲みしが、此奇縁に纏れ合ひし仇敵二人は、夫れより一週日

の間共に其地に於て、水陸摩訶の大法會を嚴修して、亡き舊主の靈に供養し、其法座の席に於て實之助は市九郎としての禪海の定紋を貫きて、孝子としての道を立て、此に袖を別ちて故郷へ出立せしと云ふ。

残る禪海は、三十餘年の大願も遂行し、又中川家の憤怨も解消することを得て、此地に止まり、道心益厚く、後明和四年權大僧都に進められて念佛三昧の餘生を送りつゝ、安永三年八月廿四日八十八歳の高齡を踏んで、奇しき生涯を終れりとぞ、
(耶馬探勝みやげばなし抜抄)

以上の由來に依れば、洞門開鑿の功は、唯り之を禪海のみに歸することを得ざるものと云ふべし。

道もなき山をうがちとほしたる

いさをは耶馬の名にもまされり

十三 中津福翁邸址

中津市に戻りて、留守居町なる福澤先生の舊邸を訪ふ、邸は今市役所の保護管理に

屬す途を距て、記念圖書館あり。
此處より同市公園に回り園内に屹立せる福翁揮毫の獨立自尊碑を拜觀す、乃ち先
生の意を酌みて

なにごともおのがちからを本として

人にたよらずうまずはたらけ

十四 小倉工場に戻りて

午後四時廿分中津驛發、同五時五十一分小倉驛着、直ちに小倉工場に赴き、竹下工場
次長の案内にて、夜間の操業を參觀す、白紙は絶え間なく、瀧の如く抄き出でつゝあ
り。

白瀧の落つると見しは絶えまなく

すきいたす紙のながれなりけり

工場を辭し、市内大阪町共進亭に於て、重なる職員諸君と晚餐を共にし、午後八時頃

自動車にて門司に向ふ、小林工場次長中村會計主任、井澤庶務主任等の見送を受け
同九時廿分聯絡船長水丸にて門司を出帆し、茲に九州を辭す。

十五 本州に歸る

船中より馬關の夜景を望めば、山上山下電光飾を施したるが如し、同九時卅五分下
關上陸、驛前の市街を散策して赤間硯等を素見し、諸氏と袂を別ちて九時四十分同
驛發東上、直ちに寢に就く。

十六 岡山後樂園と鳥城

六日午前六時十六分、岡山驛着、上石神町旅舎三好野花壇に投す。岡山及姫路は、昨
春中國四國旅行の途次、見學の豫定なりしも、當時四國に於ける旅程に變更を來た
せし爲め、遂に其本意を達せざりければ、今回之を執行せんとするものなり、着後沐
浴朝食を済まして、直ちに自動車を後樂園に驅る。

同園は旭川の清流に臨み、其直徑長き所にて、東西百七十七間、南北百七十間、面積三
萬四千六百五十六坪を算すと云ふ。

此園の起原は、貞享三年即今を距る二百四十一年前、舊藩主池田少將綱政の經營せしものにして、維新前迄は、茶屋々敷と稱し、又後園とも呼びたりしが、明治四年二月、今の名稱に改めたりと云ふ、同七年に縣の所有となり、初めて一般の縦覽を許すに至れり。

本園は水戸の借樂園、金澤の兼六園と共に、日本三公園に數へらるゝ名園にして、奇樹異草各所に散生し、奇岩泉水などの配列頗る景趣に富めり、殊に放養の群鶴は園の景致を一層美化せしむ。

園を出て、鶴見橋を渡りて途を左に取り、岡山城址に至る。

當城は旭川の曲流する西岸に位置し、流を距て、後樂園と相對せり。

當城は今より三百五十餘年前、即天正元年に宇喜多直家の築きしものにして、同年秋、竣功入城す、次て城下を區劃して、領内の富民を多く城下に移居せしめ、大に其繁榮に努めたりと云ふ。

天正十年直家卒して、二男八郎秀家其後を嗣ぎ、備作兩州と播磨の三郡を領したり。慶長五年關原役に、秀家西軍に與し、大敗して此地を除封せられ、小早川秀秋替りて入封せしも、在城僅に二年にして病死し、嗣子なきが爲め、姫路城主池田輝政の二子

忠繼其封を受け、卒後忠雄淡路より轉じて當城に入り、其子光仲を経て、寛文九年輝政の嫡孫因伯兩州の主池田光政轉封して當城に入り、綱政、繼政、宗政、齊政、齊敏、慶政、章政の八代を経て、版籍奉還となりしものなり、今現存するは天守閣のみなるが、鳥城と號するが如く、勁すみし堂々たる雄姿は後樂園の風致に一種の重みを添加せり。

烏羽玉の黒き姿をほこりつゝ、

雲にそびゆる岡山の城

十七 姫路白鷺城

午前十時十分、岡山驛發午後零時廿八分姫路驛着、直ちに自動車を驅りて姫路城址に至る、松翠の間より、巍然として聳立せる白堊五層の天守閣を仰視す。

本城は別名白鷺城と稱し、其名の如く白皚々たる清姿は現今殘存せる諸城中其冠たりと稱す、本城は舊と赤松氏の築きしものなるが、天正年間、羽柴秀吉、三木の別所を滅ぼして後此城に移り、新に三層の天守閣を築きたり、世に之を太閤丸と稱す、慶

長五年池田輝政此地に封ぜらるゝに及んで大に土木を起し、運河を通し、更に白壁の五層閣を築き、城全躰の規模をも一變せり、池田輝政は當時加藤清正と併稱せられたる築城家にして、此城は外觀の美以外、少くとも三大特色を有すと云ふ即ち

一、城内には、いろは四十八門を設け、大手より天守閣に至る間、幾曲となく右曲し、或は左折する、此間に其方位を忘却せしむ。

二、天守と各櫓と櫓との間を、凡て步櫓にて連絡す。

三、步櫓及隅櫓に付、無数の狭間を設け、縦射横射に便し、且つ城内の通路と其狭間との配合巧妙にして、一の死角をも發見し得ざること。

之れなり、殊に第三の如きは、今日の築城専門家が舌を捲いて驚嘆するところなりと云ふ。

本城は現今姫路市の保管に屬し、觀覽料を徴して一般の縦覽を許し、亭園は姫山公園と稱す。

城内には怪談に名高き「お菊井戸」「腹切丸」「姥が石」等何れも劇的興味に富みし舊跡を存するよしなれども、時間切迫の爲め觀覽を省略す。

空にたつきよき姿は白鷺の

なく音もたかきとりてなりけり

十八 郷里訪問歸京

午後一時八分姫路驛を發し、汽車中より右方に明石須磨等の風光を賞しつゝ、又左方には人丸山及び隣接せる一柳子爵邸内を瞰視し、心中素通の不本意を謝しつゝ、神戸に着し、此處にも下車することなく、午後二時廿二分發車、同七時四分大垣驛に着し、自宅に立寄り、二三の親戚を訪問して、午後十時廿三分同驛發、直ちに寢に就きつゝ、東上、七日午前九時五十四分新橋驛着、茲に新年の初旅を終る。今其旅程を計上すれば左の如し。

日 數	七 日
行 程	往復約千九百六十八哩
通過國數	二十三ヶ國(三府十六縣)

北九州の旅畢

昭和七年十月十五日印刷
昭和七年十月二十日發行

(非賣品)

著者兼
發行者

一

柳

貞

吉

東京市麻布區市兵衛町
二丁目二十八番地

印刷者

室

伏

友

作

印刷所

王

友

社

印刷所

東京市京橋區越前堀二ノ二四

終

